

圖書過眼錄

上等

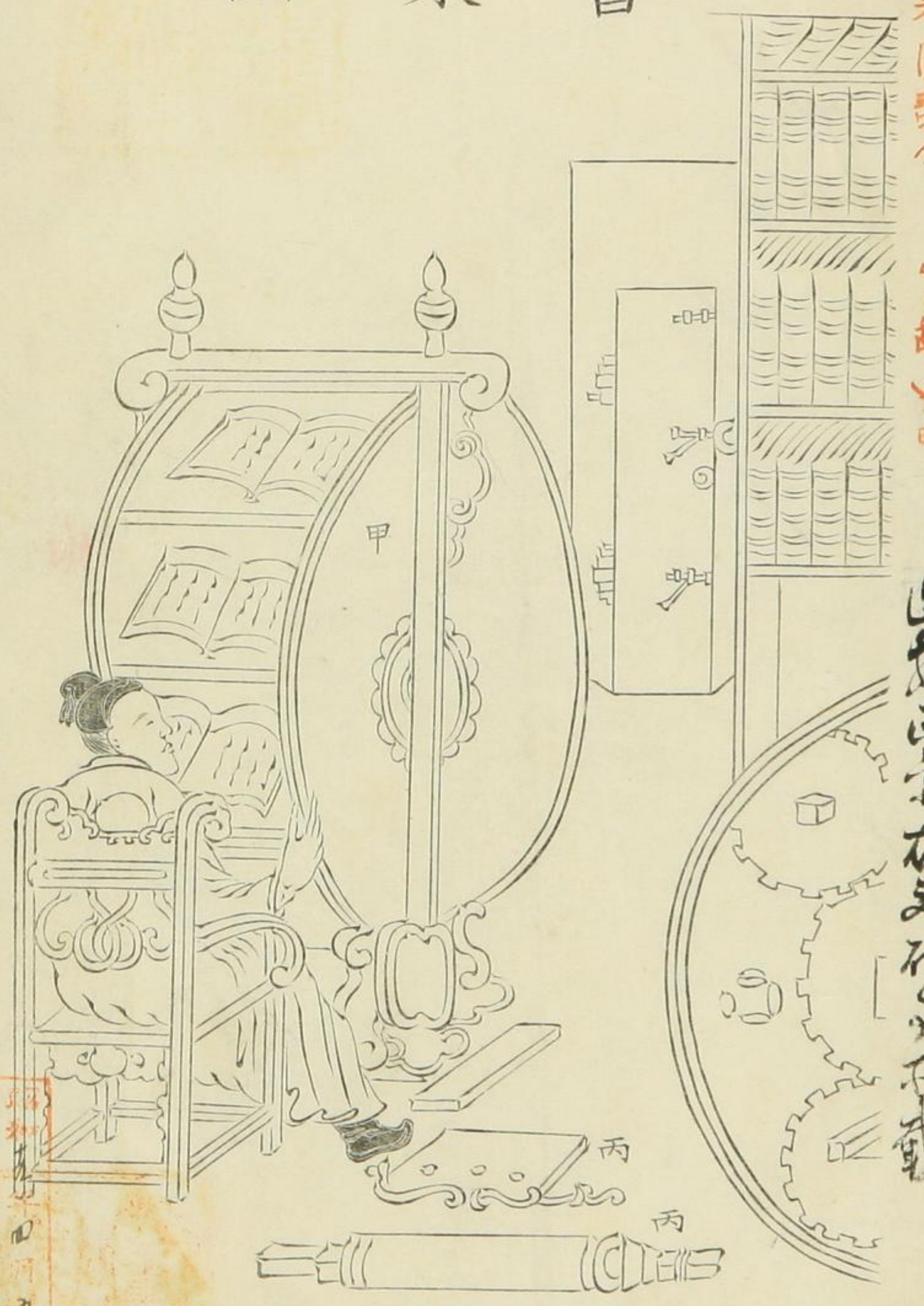
明治四十一年五月上浣起筆

特別  
14  
1919  
672



特  
門 14  
號 1919  
卷 61  
特  
門 12  
號 2369  
卷

書架圖



奇器圖說(乙丁ノ符缺ノ補)

此書は万葉文の記載

中島謙吉  
印

中島謙吉  
印

中島謙吉

明治四十年五月上流起筆

雙魚を主人

雙魚を主人  
印

の五月十一日  
とあり内閣文庫の圖書を  
んとて爾を甲とて朝とて家を出て内閣文庫  
向支那の朝井を去るを以て其の如し  
あるゆゑに物おとすを一説たり古書を  
善くして其の如く六棟あり内一棟は  
圖書を貯ふるに用ふるに用ふる。淺井文  
庫の如く男平を授けり。各書不爲の  
集めしむるに花あり。総計六七葉あり

うろくく見たりともろろ洋書のと新しき  
しうき多くあつたりんも数をはりしんのも  
くが棚と西洋式なるも陳列を冊子  
と重ぬるゆ式也なる棚の奥行を何れも深  
し、特にお回ちとるもちりやうと根山  
文章を巻花の圖ちととの葉入の目ま  
うと式ちとろく種も重ぬり、こねの  
歴史的成長具起り、何細ちと能た  
の概ちとろく、何か二十分ちとろく  
んとわけの能たを五葉と一團  
世にしともんば、内方と勿論智の

東林閣

味もあつた、在り物おき、葉に柱を二  
あるを右と括ふし得るし、林家の機  
係る正徳本朝の色燈を一説をしこと  
いへり、こゝと林家の幕方と献し  
本本を二十個はちの中、机のちの  
中へちむ、ちの葉とてあてんば、  
幅一尺二三寸長さ六尺の長方形の  
箱あり、本朝の色燈と葉を正徳し  
の葉と取んば、中へ三個の林漆の本  
を収め、又個々本朝の葉を正徳し  
隠せり、全ちもて名あし

とぞくろく、こんど一函約三十冊あがらん  
本と大紙のしるしをよのし紙を用ゐて言  
しるしを、紺地をよのし紙とつけ、紫  
題七標を、おんしるしを、書を、  
雅録採るべし、この書種を、丁史の致  
味あるもの時代印しと、最優るもの  
は、ついでと、よのしと、よのしと、  
最優るもの

他の書種あり、この書種の、  
よのしと、徳川の時代の刊物、  
朱印の原書を、  
おんしるしと、大紙四十冊と、  
大紙の四

個人のため、この書種の、  
よのしと、徳川の時代の刊物、  
朱印の原書を、  
おんしるしと、大紙四十冊と、  
大紙の四  
井の書種あり、この書種の、  
文の、文政の、書方、  
しるしと、  
上巻の、  
よのしと、  
内閣に引、  
史の、  
5冊、

この書は明治五年某月也に於て其方  
法及祀社寺院經印の五門に分ち  
て家知謗抄記書上明説に依つて其方  
法家を次第し寺院を祀社を地方  
とありありと記すこと其の大意  
檀越の原紙をそのまゝお目を念ひし  
五六十枚位つてあつたを一冊とせばし  
るゝ表紙も七各お物の色紙も用ひ  
旧し紙を裁切とすゝ張り上は漆を以  
つて刷毛目とありしをすゝのを用ひ  
たり、中より徳川氏以前のものも七枚  
あり



各々のしるし加へてとすゝり内文も  
七各の如く大部のお物朱印の標を  
此の文本文のふらへしと依りて  
ん又も親連通證の原本とて此の序  
の法をすゝるゝあり

宋元故の蘭説を印し四五行を  
似し昂す抜帆山文本文と一上内各の  
りゆをすゝるゝ宋元蘭書を  
股四縁の記号向中をすゝるゝ  
と或んと後を刺すゝるゝと  
そのを標記とすゝるゝ

字の目せしむる

劉江陽洲明集

九行本

伐檀集

二

漢隸字源

四

ソ宋政

北の伐檀集を宋政うたう

と元まうけり

多子集

十行本

方者集

十二行本

真子回轉記甚氏方信

十二行本五冊

至心辛卯、多子、徳是、方者、在刊

東林原製

四書章句

聖書

十二冊

以上元版のり舊の品を改め、白の  
元版也

以上の由自本を宋政うたう、漢隸字源  
也、五龍舎のまゝも、い、う、も、三、流、も、い、  
何、なる、神、方、なる、入、る、方、で、り、し、か、疑、り、  
能、の、し、り、華、法、考、る、を、り、比、し、能、り、  
慧、同、なる、一、なる、を、雲、り、し、り、う、こ、ん、も、机、山  
文、なる、の、し、り、し、し、由、真、者、印、指、し、あ  
る、之、版、の、由、り、て、自、ち、り、る、者、者、る、也、  
也、之、版、の、新、り、精、刻、を、稀、る、る、也、

事物考と格を日録を抄し 漢語通五十種  
収むべきものやあると 二十餘種の通考を  
抄く事物し 此の層拾遺せしがたき  
しものうらやま、やむらうらま とを  
と一七あるもの、直に僅に一二を  
のり

北條氏直の代漢留 考 一

浪華江南考 考 一

柳洪(通)考 考 一

右三考の内洪(通)の考もまた廿五考あり  
柳洪(通)考も一考あり、猶も其内



目録通考の既とあると抄くしつる(なり)  
ねとつるくの用考と逆りつる(なり) 此の  
物の通考と目録の考とあるもの二  
考あり

柳洪(通)考 三冊

言考 漢文初意の考

獨言考 五冊

言考 漢文初意の考

石を何ぞ山もの若と鏡打ちある(なり) 四  
考ありの房漢語考と柳の考とつる(なり) 二  
考あり 柳考とつる(なり) 二考あり

鳴るる山鳥の名を儀し  
 うるも物うう木も也、白石の名  
 と記したる儀も多きと同一節中  
 物の名も新くて七しこくを改  
 しとててえり  
 〇同の珠琅各々於て狩令極二百千泡本  
 四巻を輝ふ、こゝろ三巻も一巻も  
 傳へてえんもつるは抄ひたる也と又  
 同し底より全う千と物として  
 潤るるものなり

三平の靴

二冊



臣靴

二冊

二重文八年 林和島操版行

校訂の校訂本ありてえり、えんらひ精細  
 ニ千の入りたるものも多し、こゝろ三巻も一巻も  
 此も勿論表紙の見えるし、物白のえん  
 物、物の花等の措体も、古く、三  
 靴の末尾に古鈔の題詞を朱墨並あし  
 して細字し、最段又左の巻後語あり  
 朱筆

享和三年八月廿日 以武英殿聚珍版者



所収本比雖畢

狩谷印之

藝考 文化七年八月より以古鈔本校訂訛之

臣軌の止る尾より左の誤謄あり

朱 帝範臣軌考以屋代伯賢依林祭酒

舊本校訂之本寫之了 其末

皇 文化庚午八月宮以古字本校雖狩谷

印之

極高の校訂入忠實ありしし 標本とて

北考後子に示すに違ふと信し後の考き

と流りし辨る之れを早編のむと考すと

皇朝

三六

口より(五月十三日)林總し池を以又録に流

林回一丁園の本所家(百里のふれ)も何如

う北以るあり花考花考を由こて考印す

予多に決し(北の考考印のあが未立文由

悉のしむるつて考考考考考考考考考考

北以人と考考考考考考考考考考考考考

概考考考考考考考考考考考考考考考考

考考考考考考考考考考考考考考考考

考考考考考考考考考考考考考考考考

考考考考考考考考考考考考考考考考

- 信体之職の言ふに聞て
- 點人本よりかあるまゝ人々の受のせてる  
しものまきしもの
- 考しと先づ中寄以上と云ふ事  
候る事
- 四角中寄計りの由刀剣に聞て  
この中寄系礼式に聞てこの約二  
三の元と云物にあり
- 教十等浸水の痕を留るることあり  
り不考しと此の部は人のた  
まし

東橋屋製

- 寸心と書物に同じ表紙を以て  
元谷書本別文系のはり  
信と云ふも年飾とる里の  
押印あり
  - 伊勢力貞丈の自筆に字も三四教見  
す
  - 名人の肖像教書あり名も  
此物字も若干書あり
- 梗染布の巾こころを転て而も  
きんも有職ある材料と云  
其の家物に於て是れ集せし  
て粘り



のとうむ 北巻の園書と云ふに社名をもて彼を  
 評あるさうし宛のこのむある自今も四五年前  
 大体とんれにことごとくあるが此等又名古屋の  
 小寺玉鬼の遺書と云へる一巻の書と云ふ  
 リ町りままの四人を述べた書と云ふ寺との書  
 をとんれに云ふも朱んさうしむある。小寺玉鬼  
 と二代権左と云ふ仙果の及人ひえりう権左  
 系統のちの流例の数奇なるかある。ま其の  
 為書と云ふ書も云ふも云ふも云ふと云ふと  
 と云ふしゆりしものうまひのむある。大体古屋  
 の為書を類おしと云ふも、まきと云ふも

東洋書院蔵

古浄瑠璃

全平本二十餘冊出松の稀繪書  
 浄瑠璃の撰書と云ふも云ふも  
 う流筆的うまひと云ふも云ふも  
 流割と云ふも云ふも

え流筆の稀観の撰判記を云  
 えと云ふ七部集の撰判記  
 一と云ふ七部集と云ふも云ふも

ムンニヤリ本 百二十巻 并 著書 百二十巻

大抵の著書のつとめ 伝説

地圖

古版の江戸地圖第一、大坂京都の  
地圖と多くあり、珠入寺改の  
地圖は珠入寺の多し

物語草紙 後の浮世草子

漢本 草双子 俗きよの合巻

北野のものの早稲のふりかきこむわし  
而してのふりかきこむわし

海狂俳 海曲

十寺玉昆道者寸例考と珠入し  
きよのふりかき



地巻

古版本稀観のふりかきおカ寺玉昆  
白巻と信本をいふ言す

丸本枕言古本 丸る六十七冊

地巻 丸る六十七冊

三巻ある七十六冊

珍しき本稀観のふりかきおカ寺玉昆  
物語草紙の筆と草子 珠入寺改の  
信成義經の江戸版のふりかき 枕言お伽  
草子 漢本と古本を併考 河内鑑る五地、残

七部書、古今後集大旨、晚桐遺稿、後集  
 目、洋瑞瑞大系回(幸々) 修しをのり  
 扇、元浪の活米記、平河のふり記、六里記  
 景身草本等列記、の道ありふり、丸本のこ  
 きあるう丁丸舟のまきあうりててんせいふ  
 八條道さうりててんせいふ  
 ありふりててんせいふ

小寺玉晃のこと、此と云ふた谷の勢を  
 候ふるは、淡氣をいふは、白文のふり  
 たりと云ふは、ぬりててんせいふ  
 系

東林風琴

必十一年五月十考記

種彦系の考證家

小寺玉晃

水谷 不倒

江戸小説の全盛期、化政度の末において、尾州の  
 熱田から、高橋彌太郎廣道といふ田舎漢が江戸  
 へ來つて、無造作に戯作者の一員となつて、笠亭  
 仙果の名を揚げたのは、文壇異數の出世といは  
 ねばならぬ。これには師と頼みたる柳亭種彦が、  
 後進を引立るに親疎を問はず、最初は唯文通に  
 て師弟の約を結びたる仙果を、書肆に紹介した  
 る同情の深きに依るといへども、而かも種彦が  
 容易に推薦の勞を取りたるには、仙果の文才に  
 取るべき所があつたからで、予は曾て、前身の『早  
 稲田文學』に、兩者の關係を叙するに當り、仙果の  
 立身の速かなのにや、疑を挿んだのであつた。  
 當時の戯作者といへば、能く都會の人情風俗を

味ひ、粹もしくは通といはるゝ人でなくは、殆ど  
 其の資格なきものゝやうに考へられたもので、  
 今日之如く誰でも文壇に躍り出すといふ譯には  
 行かなかつた。仙果の如き田舎出の人はなかな  
 か其の班に列するとは難いのである。然るに種  
 彦の拔擢に當り、兎に角江戸作者として立つに  
 至つたのは、當時にあつては餘程の番狂はせで、  
 如何して仙果が、種彦を感服せしむる程文才を  
 養つたか、又彼れを産むべき戯作者の種子が、如  
 何して尾州の熱田あたりに蒔かれてあつたか、  
 といふ点について不審の雲が晴れなかつたが、  
 近頃小寺玉晃なる人を知るに及んで、はじめに  
 仙果の出處に對する疑團が氷解した。それと同

時に、當時名古屋には隠れたる文學者の一團體があつたを發見した。

名古屋は上國といひ、京大阪と江戸の中間に立ち、古來兩者の文化に浴し、國學俳諧等の發達については、名家も出で、著書の版行されたものは澤山ある。殊に劇については、歌舞伎の始祖名古屋山三を出し、慶長年女歌舞伎を演ずる等、歌舞伎の起源については由緒ある所で、爾來一地方として、能く獨立して文藝を發達せしむる力は乏しかつたけれども、歌舞伎の如きは、常に東西の名優を招致して不自由を感せず、三都と共に觀劇趣味を養ひ、其批評の如きは、やゝ皮肉にわたる譏りを免れなかつたが、古人はなほ名古屋觀客の見巧者たるを許し、其劇評に耳を傾けたる者で、八文字屋出版の評判記も、一地方として名古屋を度外視する能はず、紙面を割いて其の評判を載せた。是等はいかに名古屋が劇界に重きをなしたかの一證である。又名古屋では、獨力評判記を刊行したともある。江戸すら八文字屋に依屬して、未だ評判記を刊行せざる享保の末、

同地では『名古屋帯』以下數種の評判記を發行して、其批評眼の肥えたのを誇つたものである。其他の遊廊の細見の如きも、早くよりこれを刊行し、降つて文化文政に至つては、江戸の影響を受け、菟蓐黄表紙の此の地に入るもの頗る多く、遂に書肆永東は、江戸より古版本を購入して刷出した。黄表紙中繪表紙なく、半紙刷のものが往々今も古本中に散見せらるゝが、これは名古屋製で、近年に至り其の版本の他へ轉賣せらるゝに當り、草双紙を交へ七八十種もあつたさうだ。曲亭馬琴の小説は、これも後に其の版本が大阪に購はれ、彼地で刷出されたもの數種あるけれども、菟蓐黄表紙草双紙等は、上方趣味に投じなかつたものか、當時京阪へは多く入らなかつたものらしく、今日彼地に、是等の古本を發見すると極めて稀なるは其一證である。然るに名古屋では、今なほ各所に發見せられ、當時江戸を除き、これら滑稽趣味を能く愛讀し、能く理解したものは、地方人では唯名古屋人あるのみで、京阪に馬琴の迎へられたのは、畢竟淨瑠璃文學の感化

に依るので、菟蓐や黄表紙は彼等の多數に、十分其の妙味が解せられなかつた。此の點より見る時は、當時名古屋の文學趣味は、遙に京阪の上にあつたことを證據立るので、其の結果として又同地には文學を談する者が輩出した。即ち平出龜壽、永阪一桂堂、松尾千瑣、高橋仙果、小寺玉晁等は其の錚々たる者で、平出長阪の二氏は、醫を業とし、和漢學に通じ藏書家として知られた人(因に平出龜壽は平出鏗二郎君の祖父君に當る由)又千瑣は狂歌の名人、仙果は戯作者、玉晁は文藝風俗、おのゝく特長を以て相結び、互ひに智識を交換したので、其の中より、最も文藻に富み、且係累少なき仙果が飛出して、種彦の門人となり、江戸に出て戯作者となつたので、此の團體よりいへば、其の選良を中央へ出したと一般、仙果は實に名古屋文學團の代議士であつた。斯くして仙果は、江戸に出て戯作者の班に列することになつたのだが、名古屋に残つた團體は、仙果を通じて種彦の藏書を貸出し、彼等はこれを筆寫して珍書を集る機會を得たので、筆寫に

は小寺玉晁が當り、平出長阪等の人は其の資を投じ、各自文學を攻究したといふ形跡が見ゆ。現に玉晁の藏本には、柳亭種彦の藏本を仙果が寫し、又これに筆寫したといふ、奥書のあるものが澤山ある。されば『江戸節根元記』、『淋しき座の慰』、『吉原書籍目録』、『浮世繪類考』、『戯作者小傳』等燕石種的文藝風俗の關係書は、當時既に此の團體によりて名古屋に輸入された。是等の事實を總合し來れば、或説の如く、仙果が最初種彦の門人となるに當り、未だ面識なく、書通を以て師弟の交を結び、草稿を送りて師の推薦に當りしが、仙果は自家の原稿料の甚だ薄きを不平に思ひこは恐らく種彦が中間に立ち、私するものなるべしと思ひ、江戸へ下るや師の家を尋ね、鶴屋の言に依りてはじめて師の清廉なるを知り、却て己れが卑劣心を恥ぢたといふと、此の事を後に鶴屋より種彦が聞いて不快に感じ、爾來師弟の間は疎遠になつたといふ説は、どうも十分信を措くに足らぬやうだ。師弟の間は依然

として變ることがない、恐らく其の後も常に師の家に入入して、珍書などは自由に借出したものだと思はれる。尤も種彦が世を去つて後、仙果は無断にて二代目種彦の名を襲いで非難を受け、同門の高島藍泉は、之を憤り、自立し亦二代目種彦と名乗つた話がある。これを見ると師の歿後門人間に軋轢の詰らない相續争ひのあつたことは事實で、是等の關係より、戯作者としては異人種の仙果は、中傷もされ、事實以上惡しさまに吹聴されたこともあるらしく思はれる。さればさて師の名を僭稱するなど、素より仙果に越度がな

いではない、原稿料の事から師の勘氣を蒙つたといふ説はどうか、餘りに常識に外れた話で、いかに仙果が輕薄でもマサカとそんな事もあるまいかと、敢て仙果を辯護するではないが、序なればこゝに一言する。

明治四十一年四月の巻 本欄

氣焔を吐いたのであるが、『八顛愚冥迷奇談』(五卷)は、其の製作の一である。此の連中は斯くして文を談じ、句を練るに満足せず、一方には遊廓芝居、草紙物語等の古書を蒐集して誇つたもので、軟文學の古版類は、彼等の文庫に充滿したのである。されば耽古會では延寶八年版の吉原評判(二枚刷)を、天保九年百枚限り模刻して、後は版を滅し、同好に分ち大いに嬉しがつたもので、彼等は江戸における化政文藝の全盛を羨望し、名古屋をして小江戸たらしめんと夢みたものである。しかし其の連中には、小さき京傳も、馬琴も、一九も、三馬も居なかつたやうだ。勿論予は彼等の遺稿の十が一も見ないから明言することは出来ないが、京傳や一九の多少眞似られたものは、概ね不成功に終つてゐる。たゞ此の中より小種彦を出したことは、草双紙の合巻、續物の作者に仙果があり、文藝風俗の考證に小寺玉晁があつて、戯作の一面は骨董趣味で、つまり彼等の文學を弄ぶのは世の風潮として、道樂三昧の外に出なかつたのである。

七十七

明治四十一年四月の巻 本欄

小寺玉晁は、尾州藩の家老大道寺玄蕃の家來で、通稱は九左衛門、名は廣路、字は好古、連城亭、玉晁、東杉舎、珍文館、續學舎等の數號がある。城北の東杉村といふ所に居を卜し、陪臣で祿の少ない上に、酒好きで斷えず酒氣を帯んでゐたといふから、家資は素より豊ならず、貸本屋大惣、又は同好者の需に應じ寫本をして、僅の報酬を得其の不足を補つて居たといふ事である。又伊勢の人で『俳諧大系圖』の著者生川春明とも交際してゐた事が、遺著のうちに記してある。春明は國學者で、素より柳亭を學ぶ由もないが、しかし文藝風俗に關する著述には、やはり種彦系の考證家で、これも多少其の感化を受けたことは争はれぬ。玉晁も此の點は頗る春明と善く似た點であるが、春明は『俳諧大系圖』を刊行して、其の造詣の深きことを世間に知らしめ、早く既に名を成したけれども、玉晁に至つては、一も其の著述を公にする機會がなかつた爲めに、其の遺稿は悉く篋底に紙魚の腹を肥し、今日に至るまで知る人の稀であつたのは殊に残念で、若し玉晁を

七十八

して江戸若しくは大阪にあらしめたならば、一鳳、豊茶、老樗軒等の人々の上にあつたことは疑を容れぬ。まことに田舎學問都の午睡に如すの言に脊かす、彼れは埋れ木で終つた。玉晁は寛政十二庚申年の生れで、明治十一年九月、七十九才の高齡で歿したが、生涯の過半は隨筆と珍書の蒐集で、其の一部分の力が、戯作と考證に用ひられた。恰も其の晩年に維新の大變革が起つて、此の間主人に従ひ東西に奔走し、自ら目撃した事實と風聞に係るものとを問はず、大小洩さず其の健筆に任せて記したもので、又明治の初年、廢藩置縣の際、各地方に起つた暴動、例へば飛騨騷動、熊本騷動等を記したもので、若くは尾州家に關する古記録、名君の言行録、藩中の秘事等を記したもので、玉晁の根氣と健筆とを稱するの外、何人もすること餘り珍とするに足りないが、左に擧げる文藝に關する著書は、玉晁が最も精力を傾注したもので、又實際今日には得がたい材料である。



先づ歌舞伎をはじめ淨瑠璃其の他諸興行物に關するものを拾つて見ると、

▲續尾陽勾欄始志三▲芝居數の中一▲尾張芝居雀一▲見世物雜誌五▲戲場評判記目錄一▲淨瑠璃外題いろは分三

等で、右の中には予の未だ見ないものもあれば一々説明することは出来ないが、『續尾陽勾欄始志』といふは、天明二年西村海邊といふ人の著した『尾陽戲場事始』の後を承けたものらしく、尾州のみとはあるが、他地方と異なり、演劇史の好資料は無論である。『見世物雜誌』は文政元年より、天保十三年迄、二十五年間における名古屋へ巡行して來た、歌舞伎以外の諸興行物の留書で、これに挿繪を施し、時に風俗壞亂等の廉を以て、禁止された場合等には、其の事故を明記しあつて、これらの多くは皆京阪もしくは江戸より入込みたるものなれば、これによりて當時我國に行はれたる見世物の種類を知り、風俗史料とすべく、小唄に關するものにては、

▲小歌こくもく草紙一▲小歌志彙集二▲童謡雜錄一▲小歌の

明治四十一年四月の卷 本欄

ちり一▲どいつぶし根元集一

など頗る面白き書目見ゆれども、いづれも未見の書にて、其の一斑をだも説明することが出来ぬ。は遺憾である。又文藝風俗地理に關する隨筆もしくは考證にては、種彦が『遠魂紙料』を學びたる『可見圖益志』(一)がある。老樗軒が『名塚墓所一覽』に對する『名府墓所一覽』(一)がある。『増補浮世繪師考』(一)、『續世事談』(一)、『俗の歳事記』(一)、『尾陽祭禮年中行事』(一)、『尾張八丈』(一)之は、『江戸砂子』、『京廉子』等に類する書。『虛無僧雜記』(一)、『古今書畫一覽』(一)、『古今招牌集考』(一)、『其他』、『人倫訓蒙圖彙』(一)は、『人倫訓蒙圖彙』の補遺ともいふべきもので、『人物圖會』(一)は名古屋における一種の畸人傳である。『歲月錄』(一)は名古屋における『思ひよる日』で、時に辭世小傳を附したのもある。『傳聞過去帳』(一)は著名な人、著名事件にて死したる者の書留で、心中縊死等も記されてある。又辭世を集めたもの、狂文又は序文を集めたもの等枚舉に違あらず、實に玉晃は物數寄の結晶と云てよい。著者は仙果と同じく、

七十九

明治四十一年四月の卷

本欄

森高雅の門人で浮世繪を好くし、著書の性質に依り、圖書を挿入してゐる。これが殊に光彩を發してゐる。しかし未定稿の多いのは必竟刊行の機會を得なかつた爲めであらう。叢書、記録類の重なるものを擧ぐれば、

▲連城叢書五十四卷▲反古袋五卷▲名府太平記四十四卷▲連城亭隨筆十四編百十二卷▲鳥の巢九卷▲紅葉集十卷▲東西評林六卷▲東西紀聞九卷▲俳叢卷數未詳▲日記百余卷▲珍文叢書數十卷

又戲作には『晝夜用心記』に類する『繩張草紙』がある。藩中の姦通、欠落不埒者の事件を集めた『近世淫亂集』がある。藩士の秘密を計いた『落馬集』寓意談に『井中蛙物語』、『續腰栗毛』、『狂戲文集』等があるが、いづれも單純な趣向で、文章も妙でない。所詮玉晃は戲作は拙く、前にも述べた考證隨筆が本領である。唯くれぐれも地方に在つて、刊行の機會を得なかつたが、残念だ。若し彼れをして著述する傍ら版行する地位にあらしめたならば、其の未定稿の分も、着々成効したのみならず、其の著述は是等に止まらなかつたであらう。聞く玉晃には嗣子があつたけれど、既に世を去

八十

り、今は家もなく、孫に當る人が東京にありといへど、詳ならず、其の遺稿は藏書と共に他に預けられてあつたのを是迄、二度も賣却せられ、過半散逸した殘本が昨年其の遺物と共に悉皆賣却せられたといふことで、予も昨年九月名古屋へ趣いた時、其の零本二三を手に入れ、知人について著書の一斑を知り、又平出鏗二郎君などより、玉晃の爲人等を聞き、結縁の爲こゝに埋れたる著述家を紹介し、併せて仙果との關係、柳亭種彦の影響等を述ぶるに至つた。(未完)



の刊行をいふ事古くは経世の部よりある  
 在付し終り也 二虎付とゆふ冊精る一  
 年ぬをあらし流しお集れ印ふ分て  
 式んと著名のいふを流しお集れ印ふ分て  
 印ち左の目ぬ載るるの如し 唯は吟  
 二頁載るる二冊と云ふも載るる如し  
 他の印つり橋衝上ねぬる二冊との如し  
 得るる如しお集れ印ふ分て  
 古くは心を得るる如し  
 在付し苦心を伝ふる如し  
 一七しお集れ印ふ分て

狂歌目録

狂歌目録

総集

古今夷曲集 甲	一〇一
全	一〇四
後選夷曲集 一—六	一〇七
全	一〇九
全	十一
狂言鶯蛙集	一九四
萬歳狂歌集	一四七
徳和歌後万歳集 上	七六

徳和歌後万歳集下

才藏集上

全 下

萬代狂歌集 一、二

全 三

全 四

醉竹集

別集

吾吟我集

卜養狂歌集

狂歌鳩杖集

家つと

置土産

机の塵

拾遺家つと

續家つと

狂歌落葉囊

岡持家集 我面白上

全 下

六樹園家集

八六

五八

五八

二〇〇

四四

一三〇

九二

一〇二

六二

三三

四一

五〇

四〇

五五

三二

六〇

八六

六六

四九

1598

朱樂飲家集

滄洲樓家集

蘆荻集四冊

雜

狂歌酒百首

仙臺百首

百鬼夜狂

飲食狂歌合

狂歌  
評判  
俳優風

合

三四

一二

三四八

一四

一八

三三

一五七

二四

二六

合

狂歌合五仙

壺寸み札

二五

二五

一四

三〇〇冊

326

1070

の刊行も後述の事法 治次七版本のものと異なるが刊  
行の順序も書名の細流などの元古と大花一説と  
もともなうるを知らず 未詳の互江山城の  
文選こそあるべき 相流字をええ文選と  
也十年の改訂又文選と未詳の相流  
も一々あるを知らず 相流字をええ文選と  
相流字をええ文選と未詳の相流  
と細流字をええ文選と未詳の相流  
と未詳の相流字をええ文選と未詳の相流  
と未詳の相流字をええ文選と未詳の相流

相流字

と互江山の相流字をええ文選の改訂也  
一々あるを知らず 相流字をええ文選と  
の相流字をええ文選と未詳の相流  
と未詳の相流字をええ文選と未詳の相流  
の元古と大花一説と未詳の相流  
人の相流字をええ文選と未詳の相流  
あつたと思はるるが 相流字をええ文選と  
未詳の相流字をええ文選と未詳の相流  
此人と相流字をええ文選と未詳の相流  
○未詳の相流字をええ文選と未詳の相流  
と未詳の相流字をええ文選と未詳の相流

此（書）……は、寺の……の……  
 カ……無……し……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……

甲午年六月百 壬戌記

陳棟原製

靜嘉堂文庫ニテ清國湖州歸安、陸氏心源  
 舊藏ノ書ヲ購入セシ顛末

男爵岩崎彌之助氏、心ヲ典籍ニ用弁、遺佚ヲ搜討  
 シ、希珍ヲ蒐羅スルコト年アリ、名家碩宿ノ舊藏  
 撰著ニ遺フ毎ニ重賞ヲ捐テ、購獲スルコト、前  
 後十數次、文庫ヲ駿河臺東紅梅町本邸ノ北崖ニ  
 建テ、靜嘉堂文庫ト名ヅク、儲フル所現ニ二十  
 萬冊ニ下ラス、

明治三十九年ノ頃、清國浙江省湖州府歸安縣人、  
 陸氏樹藩、字純伯、樹聲、字叔同、兄弟ガ其先人心源

筆書合記 陸氏

字剛甫、歸存  
齋又潛園

宋樓、十萬卷樓、守先閣、收藏セル

書籍、全數ヲ出シ、售ラントノ意アリ、其事、蕪州領

事、白須直氏ヲ經テ、男爵ノ聽ニ達セシガ、未タ協

商ニ至ラスシテ止ミタリ、價ヲ要スルコト五十  
萬兩ナリシト云ス

當時、虚聲ヲ傳播スル者アリテ、我宮内省ハ、二十

萬圓ニテ購入セラルベシトイヘルヲ聞キ、白須

領事ハ、其實否ヲ確ニセシガ為ニ、宮内省ニ電問

セシニ、全ク虚説ナリシコト明白ニナリシヨリ、

領事ハ、如此ル無根ノ空言ヲ、間ニ居リテ交渉セバ、

或ハ累テ國文ニ及ホスモ、測ラレドトテ、深ク苦

慮シ、復其事ニ干與セザリシト云ス、其後男爵ノ

甥久彌氏、英國ニ詣リシトキ、駐英ノ清國公使館

員ヨリ、再ヒ陸氏售書ノ話アリ、久彌氏歸途、上海

ニ寄泊シ、同地ノ三菱會社支店長、田原豐氏ニ因

テ、事實ヲ審覈シ、歸後之ヲ男爵ニ傳ヘ、四十年ニ

月、其書目、男爵ノ許ニ達セリ、男爵ハ、ナル希覲ノ

珍籍ナラバ、價ヲ議シテ、購收スベシトテ、其意ヲ

支店長ニ致セリ、是ニ於テ、陸氏ハ、上海ノ姚氏文

藻字賦ト云者ニ託シテ、田原支店長ト訂議セシ

メ、價十萬元約我十一萬  
五千圓許ニテ、購收セントノ協約

遂ニ成レリ是レ四十年三月、初十日ナリ  
サレバ、陸氏舊書ノ事ハ、始メ白須領事ニ因テ傳  
ヘラレシ、事ヲ以テ中廢シ、再ニ駐英清國公使館  
員ヨリ、久彌氏ニ傳ヘ、上海支店長ト、姚文藻氏ニ  
因テ訂約成リシナリ

然ルニ島田翰氏ノ百宋樓藏書源流考ニハ、下  
ノ如ク云ヘリ、乙巳丙午之交、予因江南之游始  
破例、數登陸氏百宋樓、悉發其藏讀之、中遂德惠  
其子純伯觀察樹藩、必欲致之於我邦、而樹藩居  
奇、需值甚昂、始歸五十萬兩、次稱三十五萬圓、後

稍減退、至ニ二十五萬圓、時丙午正月十八日事也  
返棹歸、而謀諸田中青山先生、不成、先生曰、能任  
之者、獨有岩崎氏耳、余將言之、而予亦請諸重野  
成齋先生、今茲丁未三月、成齋先生有西歐之行、  
興樹藩會滬、四月、遂訂議為二十萬圓、此言ニ據  
レバ、島田翰氏ヨリ陸樹藩ニ勸メテ書ヲ售ラ  
シム、重野先生ニ請テ、其事成リシガ如ク聞  
ユレド、事實ハ頗ル齟齬セルナリ、購収  
購収ノ訂約已ニ成リシヲ以テ、書籍領収ノ為ニ、  
寺田弘、小澤隆八ノ二氏、上海ニ赴キ、四十年五月



二日發程、八日上海に着セリ、寺田氏ハ姓ニ上海ニ寓スルコト数年ニシテ、其地ノ事情ヲ熟知シ、且陸氏ノ家ニ至リテ、數日間寄寓シ、其書ヲ檢閲セシコトアリシヲ以テ、便宜ヲ圖リテ、特ニ委嘱セシヤリ、小澤氏ハ岩崎家ノ記室ニシテ、靜嘉堂文庫ノ典守ヲ兼タリ、

兩氏上海ノ旅館ニ淹滞スルコト月餘、書籍未タ上海ニ達セズ、此ハ陸氏ノ親戚中ニ異議者アリ、先人ノ心ヲ竭シテ蒐羅セシ珍籍ヲ、斥賣スルニ忍ビズトノ言アリシニ因レリト云フ、姚氏文庫

間ニ居テ調停シ、其約稍ク成リ、六月日、書籍始テ上海ニ達セリ、姚氏ハ資産家ニテ、陸氏ハ嘗テ資ヲ稱貸セシ故ニ、若シ此約成ラザルトキハ、姚氏ハ耗損ノ已レニ及フベキヲ患ヘ、大ニカヲ盡シタリト云ヘリ、

ニ氏已ニ書籍ヲ領受セシニ因テ、舊函ノ上ニ蓋覆ノ箱ヲ作りテ、其毀損ヲ防ギ、寺田小澤ハ氏監護シテ、横濱ニ致シ、六月廿一日ニ歸ル、靜嘉堂文庫狹隘ニシテ、之ヲ容ル、餘地ナキヲ以テ、假ニ高輪本邸ノ西洋館樓上ニ、度架ヲ設ケテ、之ヲ

收藏セリ。

陸心源ハ世に湖州ノ歸安ニ居リテ、家資財ニ雄  
ナリ、官廣東、存廉兵備道ニ至レリ、常ニ顧亭林ノ  
人ト為リテ慕ヒ、其堂ヲ名テ儀顧堂ト曰フ、好テ  
典籍ヲ收貯シ、異函珍笈ニ過フ毎ニ賞ヲ竭セラ  
購收シ、藏書ノ富、大江南北ニ甲タリ、其書ハ上海  
ノ郁萬枝松年、常熟ノ黃蕘圃丕烈ノ舊藏尤モ多  
シ、其居ノ樓上ヲ以テ書庫トシ、分ケテ二トシ、一  
ヲ皕宋樓ト曰ヒ、一ヲ十萬卷樓ト曰フ、別ニ其家  
ノ潛園中ニ於テ、守先閣ヲ建テ、皕宋樓ニハ宋元

板ヲ儲ヘ、十萬卷樓ニハ名人ノ手鈔手校、及ヒ明  
以後刻本ノ佳ナル者ヲ收メ、守先閣ニハ尋常ノ  
刻本ヲ收メタリ、守先トハ心源ノ父ノ聚メタル  
書ニ係レルヲ以テ名ケシナリ、心源又皕宋樓藏  
書志一百二十卷、續志四卷、儀顧堂文集二十卷、儀  
顧堂題跋十六卷、續跋十六卷ヲ著シ、古書ノ源流  
ヲ敘セリ、其他撰述甚富ナリ、心源ノ事歴ハ、其子  
樹藩ノ撰述セシ行狀アリ、誥授資政大夫、誥封榮  
祿大夫、賞戴花翎二品頂戴、前廣東兵備道、加四級、  
頭考存齋府君行狀ト曰フ、行文凡六十餘言、其詳

贍ヲ極メタリ。

陸氏ノ藏ハ、百宋樓ノモノ尤モ精善ニシテ、北宋刊十二部、三百四十八本、宋刊百十五部、二千五百六十一本、金刊二部、十八本、元刊一百十一部、一千九百六十一本、明刊十六部、一百四十九本、影宋鈔十五部、七十一本、校宋本一部、六本、明治字版一部、二本、日本古鈔一部、五本アリ、書目編纂既ニ成レリ、

宋元ノ舊製諸本、毫モ蟬蝕莫朽ノ跡ナク、繕脩裝裱、其完備ヲ極ム、百宋樓藏書、深流考ニ、予因江南之游、始破例、數登陸氏百宋樓、悉發其藏讀之、太息塵封之餘、繼以狼籍、舉凡異日之部居類彙者、用以能蠹魚トアルハ、其實ニ合ハズ、每葉其紙心ニ別ニ一紙ヲ挿ミ、原紙ヨリ較大ナラシメ、決ニテ原紙ヲ裱背シ、及ヒ原紙ノ上下兩端ヲ直チニ截断スルコトナシ、此ハ原紙ヲ裱背スル件ハ、一ハ紙ノ種質明ナラスニテ、書ノ鑒定ニ妨ナリ、一ハ墨澤湮晦ニテ、古色ヲ失フ、一ハ紙ニ糊氣ヲ含ミテ、蟬蠹ヲ牽キ易キカ故ナリ、我邦古書ヲ收藏スル者、直リ取テ準トナスベシ、

十萬卷樓ノ書ハ本ト弱宋樓中ニ併蔵セシテ、名人  
 手鈔手校及ニ刻本ノ佳ナル者等ヲ分ケテ、別ニ  
 此樓ヲ設ケタリト思ハル、罕覩ノ書ヲ、書手ヲ擇  
 コラ補鈔セシモノ多カルベシ故ニ鈔本過半ナ  
 リ、裱裝未タ成ラズ、皆小楷端好ニシテ、一字モ草  
 率ニセズ、書目今編纂中ナリ、次テ將ニ守先閣ニ  
 及ハントス、其書ノ原委純瑕等、皆書目ニ載セテ  
 レバ、此ニ一ニ列挙セズ、日ヲ改メテ掲載スルコ  
 トアルベシ

文庫書目録  
 此書ハ文庫書目録ニシテ、其書目今編纂中ナリ、次テ將ニ守先閣ニ及ハントス、其書ノ原委純瑕等、皆書目ニ載セテレバ、此ニ一ニ列挙セズ、日ヲ改メテ掲載スルコトアルベシ

文庫書目録  
 此書ハ文庫書目録ニシテ、其書目今編纂中ナリ、次テ將ニ守先閣ニ及ハントス、其書ノ原委純瑕等、皆書目ニ載セテレバ、此ニ一ニ列挙セズ、日ヲ改メテ掲載スルコトアルベシ

此刊是利を校書を方員海の坐に以て教を  
の考と版を掲げあらし即ち同校書を考の心  
よりの考を考の考を考の考を考の考を考  
古文方書

二冊(十三巻)

古言本

才二喜未と雪と罽し印を校書

蓋し珍中の政費中の費法人徐既  
志の如き純賞し以て稀世の珍書と  
なり

論語序

何晏集解

聖子

叙曰漢中星東西南北四人有將軍可北方也校尉  
刻向言曾論語二十篇皆孔子弟子記諸善言也  
者利德之孫利歎之子前漢時為中星校尉也  
今里城使也其人持字經史孔子後而才子  
而記之初為學人所學故諸善言也又曰  
向有各也中星百石也校尉也校書也

一 論語義疏

十冊

古字本

紙教三三九丁

每卷首尾是利子孫の印及車轉文之印あり

睦子と四角し印を捺す

根本避志刊行の原本

其首

論語義疏 卷第一 始而 梁國の終 是即

皇侃撰

東洋印刷

注云剛柔失位其道未濟故曰窮也 夫夫剛決柔也君子道長小人道憂也

上杉右京亮藤原定忠書

唐易注疏卷第十三

端平二年正月十日鏡陽嗣隱陸子遵尊

先君手抄以朱點傳之時大雪始晴謹記

一 周易注疏

十三册

宋版

冊毎に是利を撰公角と墨し冊尾に上杉衣  
宗亮存る意忠字ありて下誌あり  
毎冊又年月日を記し陸子遵(陸游の子)  
三山字易東總標説のぬき子遵(自書)  
の語ありて其の十三冊末に記する字あり  
ぬりぬし六陸の自書也

陸子遵

鄭國二十一篇五十三章二百八  
十三句

毛詩卷第四



一毛河鄭箋

七冊卷十一十二欠

古字本

每冊尾不空之國字の印也

者可以觀其志焉者孝子堅強其居喪則能守其志節若無志節則非堅強禮以治之者言用禮以治居喪之節義以正之者謂用義以正居喪之禮孝子者謂孝順之子弟弟者謂遊弟之弟貞婦者謂貞節之婦皆可得而察焉者若能依禮合義有仁可觀其愛有理可觀其知有志可觀其強則是孝子弟弟貞婦也若無此事則非孝子弟弟貞婦也故云可得而察焉也

上校安房守藤原憲實寄進



禮記正義卷第七十



禮記正義

三十五冊

宋版

是利也校公用 是利也校之公用也  
上於安也守於原也急於安也齊也  
抑也也

文選卷第五十七

金澤文庫

學校等進

永祿三年六月七日

平政朝卡

能化九華中更以年六十歲

義易之博百日而畢十又六

文選

李善注臣臣

宋版（所謂墨香紙潤秀雅古勁者）  
（よ）

各冊至深文之章の印あり

（各冊尾に次の如き抄行の文の印あり）

以前校言也

加朱點 三要

永禄三歳庚申林鏡七の

平氏改朝臣

大隅守能化九華史

永禄三歳申六月七日平氏改朝臣

北條氏  
馬印



陽明寺九華行年六十一之時欲赴干御  
里已在州太守氏原氏政父子聽三略  
講後詔柄之次賜之又治并任于海也  
矣

希玄學士許叔牙成玄一史藏諸周寶寧等同注  
范彙後漢書儀鳳初上之詔付秘書省傳之至今  
端泮悉取館閣諸本參校三年九月校畢凡增五  
百一十二字損一百四十三字改正四百一十一字

上松五郎藤原憲房寄進





二書價議定後由中證人擔保請三菱公司付定  
議即在書價中先劃出規銀五千兩正

附款二條

一付定銀日起限兩禮拜內由售主將書籍裝  
儲原箱盡數運滬賃屋保險請公司派人點驗  
一公司即於是日派一華友會同售主到湖州

將書箱一：封驗

三書籍到滬存儲安屋保險後再付規銀貳萬兩  
正派人點驗無誤後再付規銀貳萬兩正書籍交  
清後將餘款價銀算清付訖所有規銀兌換墨銀

應依末次時日行市為準

附款一條

一每時付銀由中証人向售主收取收条交付  
公司然後由公司將銀交中証人付給售主  
四租屋保險及看管裝運報稅等費凡公司未接  
收貨物之前皆由售主担任  
五依照冊籍或有損壞短少中証人會同公司所  
派之點驗員酌定扣除價值或請售主立即設法  
補購如有抽換藏匿等事查出後追索原銀更當  
議罰

六、倘若中途悔議並無別故在得主則罰者定銀  
在借主則依定銀之數罰出

附款一條

一、此定議約共書三本一送東京一番三菱滬  
行一交借主收執

陽春一千九百零七年四月廿二號

光緒三十三年三月初十日

代理借書人

姚賦秋

三菱公司經理

田原豐

中證人

村山正隆

東第三二號

明治四十年四月廿三日

書籍購入契約書、件

拜啓先般末社長御中、命、  
純伯所有書籍買入レ、儀、彌々墨銀拾壹萬井  
取極ノ當地代人姚賦秋ト本日別紙、通、  
契約書取交ハシ夫レト引換ハ手附金五千兩  
相渡置申矣尚ホ別紙契約書中ノ各項ハ大畧左  
ノ意味ニ御座矣

一中証人ヨリ曩ニ東京ニ送附シタル書目三  
冊補遺一冊ニ登録シタル書籍全部購買ス而

エテ 缺損不足變更其他前記書目並ニ補遺  
ト符合セザル點ナキ時ハ三菱公司ハ墨銀  
拾壹萬兩ヲ支拂フベシ

二書籍代價決定後中證人担保スベキニ依リ

三菱公司ハ先ツ前項代價ノ内五千兩ヲ支

拂フコト

附款ニ條

一前記金圓受取後二週間内ニ賣主ハ荷造

ト上書籍全部上海へ運出シ家屋ヲ借リ

火災保險ヲ附ス此ノ時ニ於テ三菱公司

ハ人ヲ派シ之ヲ點檢ス

二三菱公司ハ賣主書籍ヲ運搬スル前ニ於

テ一清人ヲ派遣シ賣主ト俱ニ湖州ニ到

リ書籍箱ニ一々符印ヲ附ス

三書籍悉ク上海ニ到着シ之ヲ賃借シタル家

屋ニ入レ火災保險ヲ附シタル後上海銀貳

萬兩ヲ三菱ヨリ人ヲ派シ點檢誤ナキヲ認

メタル後更ニ上海銀貳萬兩ヲ書籍受渡結

了後殘餘ノ金額全部ヲ三菱公司ヨリ賣主

ニ交付スベシ而シテ上海銀兩ト墨銀トノ

換算相場ハ最終支拂時ノ相場ニ準據ス

附款一條

一、毎回代金支拂ノ際ニハ中証人賣主ノ受領證ヲ取テ之ヲ三菱公司ニ交付シ三菱公司ハ之レト引換ヘニ金額ヲ支拂ヒ中証人之ヲ賣主ニ交付ス

四、家屋ノ賃借火災保險及看守荷造運搬重金稅等ノ費用ニテ三菱公司書籍受取前ニ係ルモノハ皆賣主ノ負担トス

五、書籍破損不足等アレバ中証人ハ三菱公司

派遣ノ點檢人ト會同酌量シ或ハ價值ヲ扣除シ或ハ賣主ニ請フテ直ニ法ヲ設ケ補購スベシ若シ抜キ取り又ハ藏匿等ノ事アラバ查出後原價ニ照シ相當ノ罰法ヲ議スベシ

六、若シ中途特別ノ理由ナクシテ此約定ヲ履行セザル時ハ買主ニアリテ支出シタル金額ヲ夫ト賣主ニ在リテハ取得シタル金額ヲ返還スベキモノトス

附款一條



早稲田大學圖書館

一、此約定書ハ三通ヲ作ケリ一通ハ東京ニ  
送り一通ハ上海三菱公司ニ留メ一通ハ  
賣主ニ交付ス

西曆一千九百零七年四月廿二號

光緒三十三年三月初十日

代理售書人 姚賦秋(查印)

三菱公司經理 田原 豊(印)

中 証 人 村山正隆(查印)

原本ト對照御一覽被下度矣 謹言

上海支店長

田原 豊

三菱合資會社御中

五三三ノ八ノ四四 田原 豊

姚文藻與上海綏領事書記生村山正隆書牘  
節南先生大人青覽。純伯今日尚未到，叔桐以島田  
先時取去之書，分別還與未還兩項抄一紙目錄請  
向查取。另一紙所書據稱島田末次乘轎，擅至陸屋  
強取各書，納於轎中而逃。所有目錄，因此遺失，無從  
查清。共取去若干云。望寺田先生代為查究，必能知  
其確數也。此請

台安

弟 文藻頓首

五月初四日

姚文藻所附送陸樹聲手書兩通

先存齋公手批四庫全書簡明目錄全部  
穰梨館書畫目錄抄本藍格紙抄

再末次島田翰先生到湖州，至尚宅時，因我弟兄  
及張房先生均外出，島田翰先生將書房門鎖扭  
斷，取去各書，均無細賬。因此書房係叔桐自己閱  
書之處，書櫥中書隨時移動，故無細賬可記。

陸叔桐註

高田翰先生手借各書張

陸叔同啓

影元抄元秘史 兩本

鈔本金史詳校 五本

抄東京南北朝輿地表 四本

鈔本晚詩兼 三十六本

以上四種已收回入補遺張上

抄本漢緬錄等書 一本

抄本傷寒論証辨 兩本

抄本東潛文稿 兩本

抄本竹隱居隨筆 一本

抄本今之石湖集 一本

抄本淮南子同殘 一本

抄本孫柳庭輿地偶說 一本

抄本容齋餘話 一本

抄本詩箋異同說 兩本

抄本范石湖遺書 一本

抄本織書 一本

抄本茅元儀石良集 一本

以上十二種未還

早稲田大學 圖書館

今般寺田小澤二氏致歸京陸叔桐姚文藻の手簡  
及書目持屏放地事情逐一被申聞矣付ては別紙  
目録の書籍、勿論其他貴殿が陸氏より御持屏  
の書類は悉皆致購入矣事、相成居矣間至急不  
残御取揃當文庫に御納付可相成旨男爵より被  
申聞矣に付別紙手簡及目録寫三葉相添へ此段  
申進矣也

明治四十年六月廿五日

靜嘉堂文庫

鳩田 翰殿

岩崎男爵與姚賦秋書牘

賦秋先生大人閣下、未接 先齋景仰洵深未審  
興居何似伏惟萬福今者以陸氏十萬卷慶碩宋樓  
寺先閣等藏本循約購收  
閣下居中玉成速就協濟使秘笈珍函舉屏架藏微  
閣下將伯之力、安能得如此哉銘感曷已當什襲寶  
弄傳之末昆增輝藝林播澤學海庶不致負  
閣下拳々之盛禮敢敷微忱謹表謝意節屬黃梅陰  
沴彌日千萬自重不宣

岩崎彌之助再拜

明治四十年六月廿八日

三白丁八景園書局

陸心源事蹟摘要

(前略)所著儀顧堂文集去夏

府君手編為二十卷又儀顧堂題跋十六卷續跋十六卷皆古書源流金石考證之學藏書之富甲於大江南所得宋刊至二百餘種元刊至四百餘種較之國書<sup>初</sup>四明天一閣幾十倍過之皆儲之爾宋樓于是作百宋樓藏書志一百二十卷續志四卷所得金石碑版九千餘通多青浦王尚書所未著錄者于是作金石粹編續編二百卷府君鑒藏書畫自晉梁唐宋元明而下類多神品本朝尤嗜四王吳惲所收不下七百餘軸冊于

是作穰梨館過眼錄四十卷續錄十六卷生平篤嗜唐文於蟬斷炭朽掇拾錄存與金石之文新出土者積久得二三千篇其已見

欽定全唐文者海內承學之士皆已循誦不復著錄于是作唐文拾遺八十卷唐文續拾十六卷樊榭山人宋詩紀事於兩宋詩人搜羅備至府君復輯得三千餘人得詩八千首于是作宋詩紀事補遺一百卷其厲書小傳有仕履不詳時代未著者別為小傳補正四卷古軌之有專書始于宋代洪文惠甄錄府君收藏漢晉以來甄覽千餘種謂可

補隸書缺佚見字學變遷考史乘異同證六書通  
借于是作千巖亭甄錄六卷續錄四卷別仿西洋  
石印影照全文作古甄面釋三十卷 府君既刊  
十萬卷樓叢書若干卷其他善本卷帙繁重不及  
徧刻者作羣書校補一百卷搜故鄉風雅補志乘  
闕遺作吳興詩存四十卷吳興金石記十六卷歸  
安縣志四十八卷病宋史燕簡考黨禁始末作宋  
史翼四十卷元祐黨人傳十卷嘉定錢氏疑年錄  
之作大抵詳于儒林文苑及書畫之士 府君既  
校正錢澣菴疑年錄四卷復益以名臣大儒氣節

文章之士作三續疑年錄十卷儲藏三代秦漢鐘  
鼎彝器百餘種晉唐古鏡六十餘種于是輯古今  
言金石者以補李金澗氏之缺得三百餘人作金  
石學錄補四卷合署曰潛園綵集共九百四十餘  
卷當代鴻儒碩德如倭文瑞潘文勤翁尚書叔平  
孫尚書萊山李侍郎若農侍郎漱蘭臧祭酒伯  
羲孫大常琴西吳中丞憲齋罔不傾蓋願交以學  
術文章相砥礪於吾鄉則與吳平齋太年伯俞蔭  
甫楊見山西古伯為尤契其平日手書通問 府  
君刻為潛園書問十二卷以梓人艱于鈎摹百不

又一焉其他著述如歷代史翼書畫彙考補正金  
石粹編補正元史補正廣廿一史考異于閒草堂  
彙器款識皆未卒業 不考等楹書手捧兢兢以不  
克負荷(後略)

○以下ぬるゝの款答系に版式二条 百為終系の記  
修らるゝもの有るものゝぬめあるもの日意きゝる余  
刊り念に正當を在集を印行するゝに悩む此書も七  
校訂せしむるぬのりゝ即ちこゝにぬるゝ不  
のゝの目せらるゝ

壽經慶長  
已亥刊行

寸原字朱

寸原字朱

職原鈔慶長  
己亥刊行

寸原字朱



大學慶長  
已亥刊行

寸原

日本書紀  
慶長已亥  
季春新刊

同横 分五寸五 縱寸原

願  
棟  
原  
製

中庸

寸原

論語

寸原

孟子

寸原

元龜帝宸翰答題影抄

新刊日本書紀  
神代  
上下

原寸縱六寸四分 横二寸二分



東洋書院藏

附釋音禮記註疏卷第五

曲禮下

禮記

鄭氏註

孔穎達疏

五官之長曰伯

謂為三公者周禮九命作伯○長丁丈反後比自

是職方

職主

也是伯分主東西者春秋傳曰自陝以東周公主之自陝以西呂公主之一相處子內是或為臣○陝式丹反依字當作陝何休注公羊傳云弘農陝縣是也一云當作郊古洽反謂王城郊也召時照反又作邵音同相息亮反

疏

五官至職方○正義曰此一節摠論二伯及州牧諸侯等稱謂今各依文解之○五官三長曰伯

○注職主至平丹 ○正義曰引

用 公 後 學 利 足

禮記卷之三

國子祭酒上護軍曲阜縣開國子臣孔穎達等奉

勅撰 上杉安房守藤原憲實寄進

君臨臣喪以巫祝桃茢執戈惡之也為有凶氣

在側君聞大夫之喪去樂卒事而往未襲也其已所以異

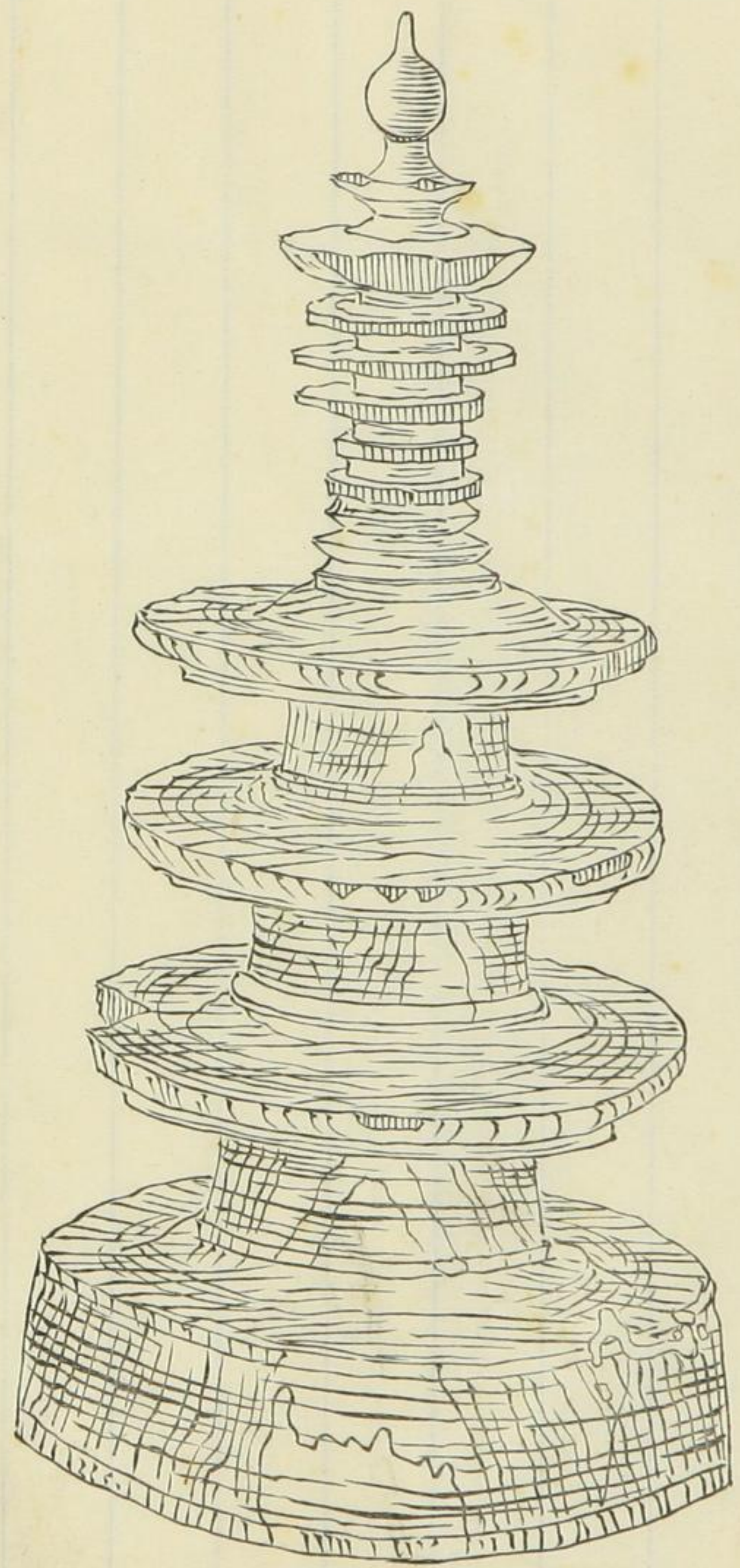
於生也生人無跡正義曰此

、、、注君聞至、、、、、

禮記義十三

木子用

上杉安房守藤原憲實寄進



羅漢原製

陀羅尼模寫(原)

与累不

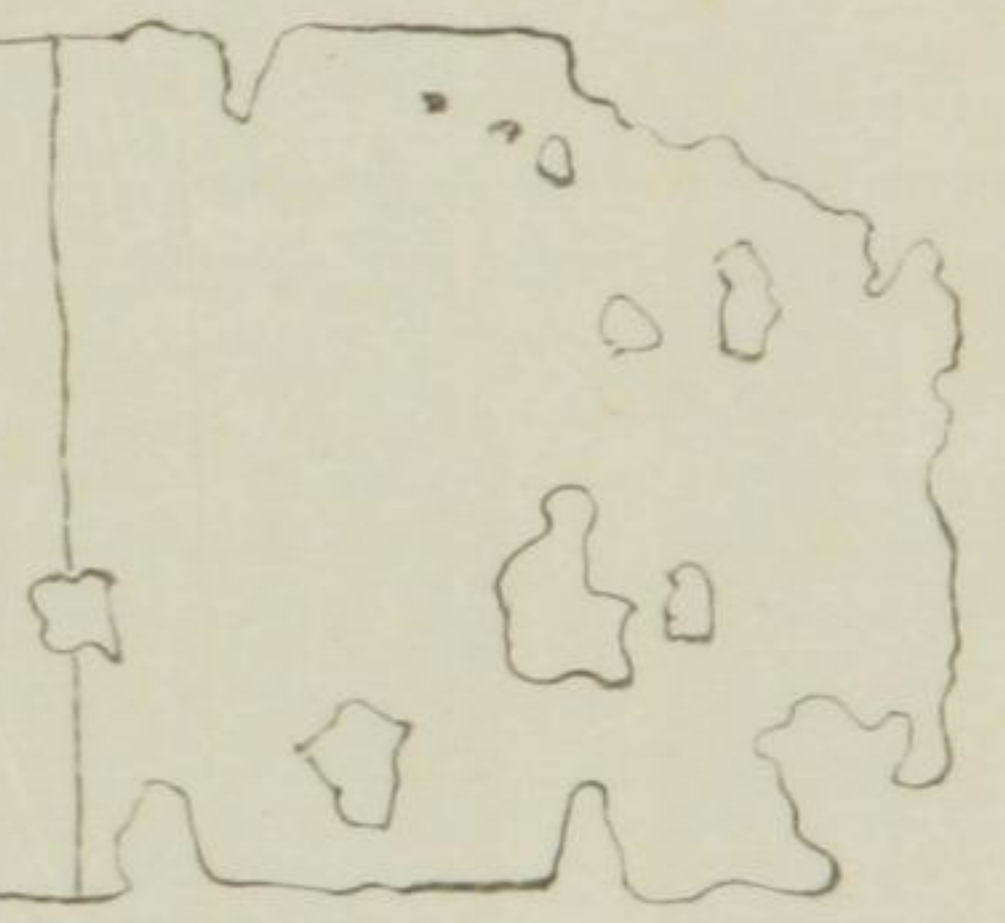
陸羅播跋輪

三身多毗魯

或轉難之故其筆禍以真入書帶合其結斷  
 与斷然說不都卷終而文字與即照書不難  
 轉今代摹大習吹圖矣會本香康吹標趁限  
 不詳致也以一節爐器以不不為難而卷不  
 限以候斷末與甲字為內書其為難上其為贊

陀羅尼模寫(摩)

与界不



無垢淨光經

相輪陀羅尼

卷一 薩婆怛

他相多毗補

羅曳 移 兼 反

瑟極 下竹 几 同 反

末尼 羯諾 迦

又 估 昌 喇 折

多 三 毗 昔 瑟

多 曳 瑟 極 口

杜 魯 杜 魯 五

三 魯 多 毗 魯

吉 常 六 薩 羅

薩羅播跋輪  
達尼七普達  
尼三普達尼  
八鉢羅上伐  
羅上曳瑟極  
伐麗九末尼  
脫檣十鶻魯  
止羅上末羅  
毗戎弟一十  
初吽莎引誦

甲

寬政十年八月真末十九日此圖予模刻其尾

云右經本今見在大和國法隆寺東圓堂

丹碧剥落殆盡其枚露盤以上用櫻以下用

檜九輪與塔身北壯合之虛其中心納經其經

則印刻獨末題甲字為肉書其紙類土佐紙質

不精好也以一幅紙摺以小片為標而卷不施

軸今所摹大皆如圖矣檜木香氣如新經則紙

已爛然殆不勝卷舒而文字鮮明點書不壞如

有神護之者其筆跡似唐人書帶分法其結構



○六月十日 岩倉家跡をえき奉を  
りて世傳陸洋源のちとえんことともとな  
北の印をの圓もちも高橋印の言はる  
三階入をいふゆへに一七ありあ  
そとを伝つて世傳松方修し  
修の事打書(書)の二巻を納ふ松方修  
し地之文を字にゆし  
井々いふ松方清く  
古多し修しを部  
丸物中りのえおを候つ  
こゝをいふ攝入地を  
東洋源

修の事入の言は  
中の傳あり  
板千田：傳  
く圓もちも  
中位をいふ  
えと大なる  
修の事入の  
あし

井々いふ松方の  
印を修し  
井々いふ松方の

と仮名しそつたるさつと御し病のあ  
 め又新く成物類は花名を撰し  
 といひて一先くふきつて世  
 左に寄目せしころ二三とちきつけ  
 他日の本を乃て改めしと云ふ

竹澤井の鳥居  
 杉方候昔ながらの御方  
 徳らふの御方御方御方

一 太平御説 合即

井茶屋 昔言其よし

徳方の御方御方御方御方  
 徳方三年正月八日  
 徳方三年正月八日



廿捌帖係有家用逢申左  
系亮お徳式秘あり

菊位各汗の家の  
花押

ころ虫十五巻 意而して終  
其印のありる不在あると云

補考本との

曆巻以前別本十二巻

及ふ代 補本 五十六巻

寛永の代 補本

二三百二十三巻

陳様原製

五山三首府南條寺天板屋

此本と云ふ

此書他別項に録せし他の一本より  
此成身方通るもあつたと見え  
或とお次のものと云ひ

一有子集

京版

全部

一初子集

一漢書

朝鮮版  
人見之徳の  
花印あり  
大本

〇〇〇

一 日本四見在目錄

一冊

古写本

狩谷横富の花本

此書尾に横富の書入二三葉あり

古体絶句の古写本あり

別條綴に改装あり

〇〇

一 林羅山千鈔本

一冊

紙のり子 別條綴

古印 表紙の裏

東洋堂製

〇〇〇

一 古鈔本

古文書本

一冊

新元伊予守の書 尾印あり

古体古雅 鈔本以前のものと

つ絶句

まことの漢文のこころを述べた書也

昔末に左の題あり

戊子七月二十日之板印言も于

夕歌巻之題あり

一〇 公平版の論

四冊の内一冊補写

其尾に題後と闕く

補写も併せし自本也

森立之四巻 花印う捺之

一 元槩

宋季三朝政要

一冊

珍しきもの也

東橋屋製

一〇 宋槩

唐款

陽城八雲軒雜記

一〇 文選七鈔本

七子本 二巻 零本

一〇〇 宋版南華真經

五冊

列條綴、改裝

南華宋自本

皇印文年賜其蓋又年子の印  
あり向山号あり七るなり花也  
し由ことありとそえくは印  
あり

数頁湖けりふと宋版式と  
摸しと補ひたり

黎虎男 福守 敬の故文あり

○物似練批  
一 黄帝 喜あり

所黄帝一霊祀

の印

美山安院花吉印ヲ捺す

〇〇〇

一 毛活鄭美

古鈔本

其子二十トキ

物ぬりふらるるもの 平 お茶

お茶子やしのる物

因 宝 印 首 捺

し 印 し を 塗 抹 し たり

奥書と書抜きと冊よと  
流るる

〇

一 宋版

前者額書

五冊

英村向山むの巻

〇〇

一 唐版

毛江鄭長

早稲田の子花と白を

宋の麻河を西の巻也

東洋堂製

一 皇親御苑

日本版

反版版を後立書と刷

後版后院の勅版と傳ふ

書道院の巻書印と捺す

以上 井：貴作

鳩田皇親御苑と井とらふにたはるる  
あり板おのりおまし作は言るるこの

ハ右の教と云えん

一 呂晚村ハ家文集 五冊

十四日

禁書燬版の一

一 胡汝中漢文考 三十三冊

十五日

天啓刻本

○ 天下郡國利病考 十八冊 二十日

原世鈔本

顧炎武の未定稿と云ふ  
原本と異るものありと云ふ  
顧の自筆といふものあり

東林堂

きんぎょ字の字生の字を以て  
ちんぎょ

一 漢文通鑑 六十冊

一 白雲軒文集 十二冊 二十日

一 白雲軒文集 八冊

林氏漢耕齋の宛印あり

刊記 咸化年刊本

版式拾めし書也

大本

一 五行文字并九行字類 三帖

明拓本 五帖

刻本墨本も拓本も有也

一 行史

三冊

乾隆司人鈔本

五十四

一 草書行史

十冊

宋摩沙本

五十四

一 歷代系正

大向信成字四冊 三十四

聖橋屋製

一 繫辭論說の

二冊 十四

以上の四本

此外別の二冊ありてしよるを  
物紀を要するもの三冊あり

〇〇

一 宋太平御覧 冊数三十九

補字本

後光厳院貞沉鈔本四十三巻

五冊 聖慮館の印を捺す

後陽成院永叔親本

六行廿四卷(二十二冊)

麻五卷首の印を捺す

二十二文字十三行本

ねおこあゆ軒とあこ記しき

ふきうつを在御淑のそおちき

し、後、後、あふふらうのきふ

し、或るあふをこつてあうーとあ

崎あふこころ同くあふこころと

あふ井り本うはふらふ、一二あ

上うあふあふあふあふの辛本

方本ゆあゆのあゆふゆふゆの二印も  
あふふは三印一とあしきゆあ  
あふあふゆあゆあゆあゆあゆ

つ

一 恒巻日記

二十四冊

杉崎恒巻の自筆日記

あふあふあふ本二十四冊日記

首巻二冊開く

文政六年：起り弘化に終る

日々の行動と見えゆのゆ

は文見ゆあふあふあふあふの按



昔の日記を以て御書とす  
らばその名の松尾の如く  
とすは其の如く御書とす  
ころの如くとす

〇〇

一 録

八冊

の殿

狩谷梅苗の御本

梅の：狩谷梅苗の御本

其の居る左の題あり

文政三年辰三月の御書也

東林堂製

梅の御本

其の終るは其の満也

余不存の御書

印を捺す

〇の昭和十一年分(昭和十一年七月)圖書部概況  
況左の如し

現在総数

一 費 益

四万二千三百三十二部 十一万三千四百六十六冊

内

和洋書 二万八千四百八十二部

九万二千九百九十三冊

洋書 一万二千八百五十一部

一万八千三百五十三冊

右の内 前年比末現況

三万六千三百三十八部  
九万五千〇六十二冊

本年比内増加

五千九百九十四部

一万五千二百八十四冊

(一) 寄託書(現在総数)

六千六百六十五部

二万九千五百二十八冊

(二) 蔵書

四万七千九百九十七部

十三万九千八百七十四冊

内

和書

三万三千七百四十冊

十一万九千七百九十八冊

洋書

一万四千二百五十七冊

二万〇〇七十六冊

本年のまゝ未だその終りの数入らざるもの  
に未だその終り未だ終らざるものありしは  
と即上池のこと——圖書をまとまらざるもの

附記

○二月十日 大蔵省電の文彦のありは交  
けたるが所記に列る如く倍するが所記  
三十年迄延滞の事ありしなり

別当館目録を大概不承の以前所記  
より所記より著記ありしこと——  
其の圖書目録著記ありしこと——  
数千の数の流る三四代ありし  
るにその流るるにその流るるもの  
少くしその流るるにその流るるもの  
其の味をその流るるもの

言を考へて其の源を尋ねて其の成りしを文化  
十一年の西遊記 本末を五巻の幕  
命を考へしを海内也

請尼利丑後林大成 言本 十五冊

之の英和音訳記書の文を七巻とす  
いふこと

此の意は八年に流言を以て母をい  
たる和書音訳記書

波再麻和解 言本 十三冊

七巻とす、出巻のあきまの流言に別  
行せし前のものことと見えし之を又和

古事記音訳記書の最たるものとい  
はれ又その書のあき

文化十一年に馬江津の著ししを河東

洲書直解集 言本 一冊

ハ和書音訳記書のあきまの流言に別  
行せし前のものことと見えし之を又和

言を考へて其の源を尋ねて其の成りしを文化

十一年の西遊記 本末を五巻の幕

命を考へしを海内也

請尼利丑後林大成 言本 十五冊

之の英和音訳記書の文を七巻とす

此の意は八年に流言を以て母をい  
たる和書音訳記書

(洋式)の文七古きを 藤志とす  
解るるを此書の跡のらるる三  
十年前より又解體の書なり  
丁卯の由十二年前也  
文化十年馬場信十印

指し花秘訣

ふんを舟程産の法をぬり西文の器  
書と評しを解るるの書あり  
るるるるの解とすしとす  
う

六書の門とす 林平一の

東洋原典

泡吹とす

法回六証

原段を余の初見する事以上  
揮、千印旋の朱印と指しと揮  
林子家宛之印と指しと下  
ふまとすきしとすきとす  
うく解るるの書なり解り也  
指しとす原段の書ありとす  
冊とすきとす指しとす  
一とすきとす補心なり

洋字の國傳るる國書ありとす

又く大いなる知識を欲するは是れなり

梅田自著

徳文註原抄 号如す

口平の事

延喜式

林智也

神業海義

石川明

月夜和名法流 市野達彦の抄

文政五年沈下

巻の末

文政九年 傳用馬子

皇統論修義疏

文政四年 四本之印しと本印を

揃す本州志名の印する所也

その四法本を四本と云

北宋版

年表註疏 号如す

古書

情中書

北帖古書を二冊と名くまゝなりとの  
りりりり

法帳ほりぞき

我修也わがしゆ

外題を撰りぬるも悉く  
別人の著しむるものなり  
明代知花の人の著しぬ也

製方入門せいほうにんもん

門々々々  
自書なり

製方砲術入門せいほうぱうじゆにんもん

仰いふは中の人と言ふ致すは  
味を感せしむるべからず  
是仰槍と云ふは遠く感也

東洋原書

○ 骨董七或目十五に列しきり

其の六は目と記すなり

大鏡 三面

横鏡

此大鏡  
中は雪隠在り

唐鏡

行々板あり

明鏡

柱目川月池

意而、四端の二は上下に  
刻し、其の月池の名四端と  
三は佛の自家の名とひき  
字の刻しあるを得て月池

ハ改定をせしと思ふ

三鏡ともは流石に佳品也鏡奩

と日本にありては朱朱をの

こし何れもあふのしと見え

ち

書画の光七彩しく排列しあはるる

もの珠のまじりしき珠をく

まじりてあはらる

盤氏と改定する事あるのみ

の光をたも余の目と見え

珠き新出の大地子傳は具



尚ニのしとをなる事と

一とと後集に記する事

一とと自家の苦心の大

その入るにを添く事

備に存之を改く事

後集

五七 九派 廿家 二十三集

等の書目ありては

しと出する後集

改定は概外史

んはしとの印を



徑路とこの時きりもあつたを  
へい謀に改めしむる也  
外に山々の自前より修む地現の  
ハツキと七三三もいふもあつた  
徑路を圓くしむる也  
凡そ月改定の田舎を修むるに  
亦改めしむる也

三

林子平其少曰く七也(六)と云ふ也  
と七也年石版抄の事と云ふ也  
亦(七)の事と改めしむる也  
寺の事羅尼と云ふ也

此の事と改めしむる也

○大内本五行之人多く印を雨沢分額略と大内  
あつちとびやくとてその本の抄りて後  
とてとて人多く印を余もぬむり印を  
伝うと此をたると印を既二式年平を伝う  
ふ以名星川も古名(の)花うすゆをゆき  
り得る初め一説たすとる

取分合額略

一冊

本より大きき長 四寸三分

幅 三寸九分

輪廓

ハカ 三寸六分

幅 三寸三分

東洋原裝

行

每行三段 行書 板敷

九行本

八十三枚

墨川本 序文 目錄 跋

補字二枚 添ふ

序 兎園印鍊

跋文云

三級一覽實於世之書也凡此於  
工於詞之士未嘗無取焉信乎用  
三級之字條次於一紙之上平仄之異  
案然於一目之中古之人上行俱下十行  
並下之說未必有論此不向快乎余平

素有意於勸人善之故不待其桐梓  
之朽腐乃復余之新其刊矣庶為是  
州府本乎然而不其字於應取冊子  
亦經其紙蓋所以備於勤于熟讀人  
者之益於中若摺於袖間也夫與  
無本曰施敷於世先節菴笑問  
也桐林則所謂徑寸之珠不失其於  
其取之小者也矣尚天文八年己亥  
春三月日

正德下云：

多々長朝在義隆

桐林

嘉祿刊梓の事

徳治申丁未未行言于一山の故

墨川本一と一と尾二其の字を消す

多々於後、大由義隆代と大由、をし、桐林と  
り、あるも其の後の死を、既、施、布、亦  
不、揚、け、ち、地、下、敷、設、く、も、体、と、五、行、と、令、  
致、と、異、り、多、義、隆、の、故、文、も、あ、る、こ、も、便、利  
を、言、ふ、し、特、に、治、刻、し、の、事、人、の、目、を、眩、し、  
し、り、と、竹、多、字、音、訓、を、附、す、り、版、式、を、流、石、  
大、名、を、又、り、詳、細、の、事、

の、記、今、丁、未、年、七、月、甲、日、記

の従来大内政と稱して傳はるゝもの  
聚分齋の略 三三三 三三三 三三三  
のめ

千重齋 三三三 三三三 三三三

山谷の江集

集 千家分齋杜工印行

首書十八史略

五任正文

四書大全

著あるにれん 取原合齋院を降くくの刊  
年の持高のゆゑとにやると 齋院

陳 棟 風 堂

千代を載すこと前項の如し 此内齋院  
のいともと 義隆の名をゆゑに 書しあはる  
五任正文のいともと 甚店に 齋院 壬子秋の  
月甲辰 齋院の傳の改より 此の千支  
の印より 天文九一二年のいともと 齋院 試その  
後より 齋院の 齋院のいともと 齋院 又集  
千家分齋 杜工印のいともと 齋院 子家  
江合齋 齋院のいともと 齋院 又印の  
るきと 齋院のいともと 齋院 又印の  
訪下 齋院のいともと 齋院 又印の  
しあはる 齋院のいともと 齋院 又印の

反折する所副せしきらうとてあふふ高の境  
とにありうらし、北のうらにけとまといつて  
やも寺のゆらうとてあふふ高の境と載記を  
きかんとは信を疑ふこと

○志州の代、移し南部の法寺に開校せ  
る法行とすなり版と稱すことより空版  
といふ、又あつたては維新の女寺法  
行と免し、今法舟北の版とす  
年間の改しあつたてをいふ版と観ん  
ハ抄りて、集まうとてあつたて白字に刻

種棟屋敷

一、あつたての刊年七、古河のあつたての観  
るも、其の刻のあつたての観るも、其の  
あつたての観るも、其のあつたての観るも  
ハ刊年一のあつたての観るも、其のあつたて  
動も、其のあつたての観るも、其のあつたて  
し、其のあつたての観るも、其のあつたて  
のあつたての観るも、其のあつたての観るも  
都法寺に、あつたての観るも、其のあつたて  
北田のあつたての観るも、其のあつたての観るも  
とす、其のあつたての観るも、其のあつたて  
中、其のあつたての観るも、其のあつたての観るも

の書も少く流字の流出せしことを誰人も  
の事なくとも流字の如く並江を要法寺  
版角倉本等皆あまふ其末の事も皆あて  
〜〜〜〜〜の如く流字の私人の流  
版の上様をうしな〜〜〜の如く、その文禄中  
版え其末元年刊のり共本補注とすこ  
人版文の修もか流南毫が通るか新刊  
一字版口補此書とある事も知らる、即一  
字版とす流字版の〜〜〜の如く私人刊  
版中流字版の権輿とす、南毫の尾州  
の人とす初の事も自ら次の臣とす、其次の

東林堂

山とむ出雲の尾尾古所：仕ふ、版文は  
京都西洞院勅解由々路南河の位を  
流の版上様とすんば其次の流亡を  
事一傳り〜二年の如くある即ち南毫  
の流人の代り〜と明けし一流人  
ある此の流も其書をみよと稱揚  
の傍にあり一説は南毫朝解の版  
流の版の捕をせし流字を借りて  
此の版を作ると或る知んぬるも  
字の修も朝解の事も未の事と  
同じ〜が版文は新刊の事あり

を以て見ぬは或之南窓の物に作りなほ  
ら

○段紙版印用集七巻本浦江の刊版  
を以て見ぬは或之南窓の物に作りなほ  
ら  
以上様入係る之を易林本に印用集七  
を以て見ぬは或之南窓の物に作りなほ  
ら  
世上の流布するもの即ち此書に段  
紙版印用集七の刊版を以て見ぬは或  
之南窓の物に作りなほら  
たる為人或之易林本を以て見ぬは  
或之南窓の物に作りなほら  
の原刻と誤解するものもなきや  
とんも段紙版印用の原刻を行なひ

東洋堂

比古波を承はる流する事、急なため五  
年の奥書ある古書を以て見ぬは或  
之南窓の物に作りなほら  
と見ぬは或之南窓の物に作りなほ  
ら  
こと以て見ぬは或之南窓の物に作り  
なほら  
の六九七七キキを天正十八年塚版印用  
集七を以て見ぬは或之南窓の物に作り  
なほら

此版本者泉物大略即塚南庄  
版所行師伝有是石部了冊  
此版本者初め時代、教供七一を以

又祿ももつも林其誤認を乞ひ休興之  
を御後しとすし初めと朱えんも世々行ふ  
後世中<sup>十一年</sup>休興削版の文を削り  
か山永次削版之と改刻し更らま天地の  
界欄を御ある等多の体裁を改るる  
不<sup>り</sup>同<sup>年</sup>又も林をを増減し字作を  
考<sup>り</sup>改めたりし<sup>り</sup>出<sup>づ</sup>お<sup>は</sup>十六年更  
其昔二行の改め鳥丸二町上日八町刊之  
と記せし魏刻を<sup>も</sup>出<sup>づ</sup>地方総<sup>も</sup>  
か<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>林<sup>を</sup>北<sup>の</sup>代<sup>に</sup>接<sup>せ</sup>  
七<sup>に</sup>き<sup>う</sup>所<sup>ふ</sup>之<sup>れ</sup>と<sup>目</sup>し<sup>て</sup>る<sup>を</sup>と<sup>り</sup>

東橋風製

二<sup>り</sup>一<sup>七</sup>強<sup>う</sup>理<sup>り</sup>も<sup>も</sup>と<sup>り</sup>と<sup>り</sup>一<sup>つ</sup>

易<sup>を</sup>法<sup>の</sup>物<sup>の</sup>著<sup>る</sup>一<sup>つ</sup>削<sup>山</sup>  
易<sup>の</sup>心<sup>の</sup>修<sup>り</sup>の<sup>心</sup>一<sup>つ</sup>削<sup>山</sup>  
高<sup>隆</sup>徳<sup>の</sup>一<sup>つ</sup>及<sup>た</sup>つ<sup>て</sup>一<sup>つ</sup>削<sup>山</sup>  
弗<sup>も</sup>心<sup>を</sup>大<sup>に</sup>一<sup>つ</sup>削<sup>山</sup>  
集<sup>を</sup>年<sup>の</sup>一<sup>つ</sup>削<sup>山</sup>  
と<sup>り</sup>と<sup>り</sup>  
易<sup>の</sup>集<sup>の</sup>心<sup>の</sup>修<sup>り</sup>の<sup>心</sup>一<sup>つ</sup>削<sup>山</sup>  
か<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>林<sup>を</sup>北<sup>の</sup>代<sup>に</sup>接<sup>せ</sup>  
り<sup>も</sup>も<sup>も</sup>林<sup>を</sup>北<sup>の</sup>代<sup>に</sup>接<sup>せ</sup>





○七月十日一ツ橋子士令にヨリ回書致取  
分岐の事をもつ海きま由を暇行が持寄  
由所はなま市にありて産島回書致取  
印積ある法家の遺しある手紙を昔に  
書ぶをも分岐にお交する事し  
促ししこと三ヶ月前にしむるありて大  
概文彦田中・物兵衛のこゝまゝ分岐に  
あちあちまゝ分岐しあること入念に  
各目録表の回書をお出しする其敷  
約るに又年一しし其の事やを左に記  
す。分岐の事しし今も此書を刊行し

原様厚製

相合るを致すの事し著あし。ヨリ古刻<sup>考</sup>  
三冊を分岐に致し又早稲田回書致  
の記念の事し。戊申七月回書十一葉の印  
を携へて分岐に致す

吉田重敏の書(分岐)を分岐に携へ  
の事し。分岐に携へて分岐に携へ  
出逢ふ(分岐)を携へて分岐に携へ

艾峰書稿 三冊 分岐に携へ

分岐に携へて分岐に携へて分岐に携へ  
分岐に携へて分岐に携へて分岐に携へ  
分岐に携へて分岐に携へて分岐に携へ

皇極自中言行

一冊

帝四回書終

皇極の施行を論じて一冊としし  
この中より少くも四の行  
本をぬめりし 留書書念花本  
と改心し刻する果物を開く  
自中本と列る中唯此の一あり  
のみ

狩器抄

此の人の遺書に中をとりし流るる

東林堂

出清さん

自中よりし優物

倭人類聚抄所録 一冊

時令 樂曲部

大観文彦

和名抄釋義 四冊

和名抄今註 四冊

横濱曾孫三市

和名抄引書 黒川其巻 冊

日本風土記文 一冊

市嶋海

横高西好日記一 静嘉堂蔵

紙入の巾を八分とす、右の横

とす、千帳の京都を( )とす、高

目せし古物の註記見他を

見者きく、認めざる、この

説文解字 一冊 同上

漢の考あるを

考家考を巧とす、考しとす

本朝度量格衡考 一冊

音圖大字考

月高旋考 1. 清の語の考を横高の考  
2. 清の語の考を横高の考

横高の千帳をもちて、又し、見ゆ丸  
~~~~~

一 延喜式四十巻 大概文彦巻

巻尾に左の題あり

文政十二年三月十二日校了

又云

以這城主為本校今校注云一本者是

也 己丑年十一月十日 狩谷虎之

一 古今著聞集二十巻 同上

題詞卷者必左

以家藏古鈔本校訂了

丙寅年夏の梅雨

以本本在寺河川紙巻本并再録之本  
校讎了

文化三年六月十日 梅雨主人

録解

梅雨を花

此本のしる前記のしる

現在書目

同上

此本のしる前記のしる 原本を

巧みなるしるしるしと意しき

しるしるもまむ撰せししるしる

由禮

く此代古く又更けしるしる

辛酉(酉)書目

よ此のしる梅雨のしるしるしる

説ニ二頁を挿めし

天文本倭名抄

外：梅雨古河紙巻

家藏のしるしるしる

出しる

此のしるしる

辛酉(酉)書目

しるしる梅雨が此の家藏のしるしる

しるしるしるしるしるしるしるしる

四帖ありぬの一帖也狩谷望  
之治翁の漢鏡を換し  
不の用也

帝範臣軌

早稲田大書院

山本山音

の自書と云々一七出るを  
手紙本の心ろくしもの

天守書院

狩谷望

漢鏡心左朱書

狩谷望山音文庫 本共市狩

東洋風製

二子書院

山本山音

又云

文政元年七月十日  
以全山音文庫

山本山音

狩谷望

山本山音

山本山音

山本山音

一部

尾張平納之宗睦公之甥也今  
倉之白山義子以俾之  
講談為後之  
其勿忘之

寛政九年丁巳秋八月申丁

山守守主殿

□□

右文取

予因する花

白布のうしろの白しんか

手紙をとりかへ

方角

あつ

二本保存

白布一本

萬葉集解札記 行本 二冊

東林風堂

采花抄後

九冊

源氏物語

三冊

以上三冊 里川喜多

市川克彦

の書讀ありしものをも心當り

夏江本

文選

稲田政友

長巻活字

善本

長巻下未活字上句八貫

校行畢

とあるものの光田彦之経之権治を志  
しある考案とす。尾に題あり。宛を  
北条果ありと直江本とす。や否やるを  
見し直江本とす。田に之を別本  
の否。志むるにこゝに縫を有  
つる。

北外

南今本

方丈記

福田政元

神橋屋製

巻尾に肉考あり

寛文十五年七月十三日の改

改あり

高の紙本

藤分韻略 田中勤三郎

法界寺の転印あり

古字様 二枚 批帖 口上

古文書 紙本 口上







自れそす四位少将(通少将)を尋  
 げ石翁山崎とてとせ母河原  
 の心作の形持と釋樂あり哉  
 と云ふと世子が改作しはるる  
 とあつては傳はる異るるそまじ  
 其信持お暮命持、橋、お茶根  
 本のまゝとらふまじいおなじよう  
 ウキヤウ、お茶根、脇、連のこ  
 とらとせとてつるべし

此本里川流しとてまじきとてし又流  
 々居申せお流後と傳ふまじり入ん

源流

との流もめんとてまおの枝まゝとて  
 元り入んあつてとて、横打のまじ  
 と未定本也、おまじきとて  
 おの流の枝まじの花若中にては  
 お流のまじきとてお茶根とて  
 あつてはあつてはまじきとて  
 おまじきとて傳ふまじり入ん  
 一とておまじきとておまじきと  
 三とて(おまじきとておまじきと)

文明の大義に則りたる武士道なり。米布人學校教科書の武士道は此の大御心に則るを要す。

### 蠹 糞 録

藤 東 田

#### ○蠹 魚

蠹魚に二種類ある。一つは人間の蠹魚で、いま一つは言ふまでもなく蟲類の蠹魚。茲にわが『蠹糞録』の冒頭を飾るべく、人間の蠹魚の中でも特に聴えたディビデン博士 (Dr. Thomas Frognall Dibdin) が動物の蠹魚を説いた一節を引く。曰く、『この小蟲が荒らし廻つた結果として、殊に古代の書籍に多く存する、まるで小銃で亂射したやうな小さな孔を氣を注げて見る、世にかくばかり奇妙不可議なものはない。巻首から巻尾まで、木板を通し、皮革を通し、頁端の餘白にも、印刷せられた本文の中にも、時に Duns Scotus の三段論で朝食をやり、或は Lactantius の獻身的な宗教感で晝飯を食ひ、次には Vicent de Beauvais の神話の一

片を晚餐と成し、此の細小な、而かも恐しく向不見な開導者は、以て其の「力ある道」を推進して行くのである！ 天下何物か此の小動物の意の如くならざるものがあらう。彼等は希伯來語を嚙り、希臘語を多量に食らひ、拉了語で燕宴亂舞し、伊太利語に飽食滿腹する！』と。

#### ○ビ、リオ定義一束

佛蘭西の La Valliere 侯爵家の圖書館員であつた Abbe Rive が與えた定義。

Bibliogaste タイトル・ページと奥附と版數とを知り、何處で印刷され、何處から發行されたなど、書籍成生の事情に通ずるもの。

Bibliographe 書籍を解題したり、其他の文學的整頓配列を成すもの。

Bibliomane 無暗矢鱈に、見界もなく書籍を積んで、おまけに其の買込む速力よりも更に大なる速力を以て、途方もなき大誤讀をやり、雄鷄程の頭腦をして居て、重い財布を持つて居るもの。

Bibliophile 書籍を愛するもの、こゝで列擧した中で、自己の快樂として本を讀むらしく見ゆるのはたゞ

書籍屋

此の部類の人ばかりである。

Bibliophile 錠を掛けて收ひ込んだり、硝子の函の中に入れてたりして、本を埋めて置くもの。

#### ○早期の伊太利の本

早い時代の伊太利の美装した本は、大抵其の縁に鍍金するのは勿論として、其の上に恐しく精巧な浮彫を施したものである。それが幾百年を経た今日に到るまで鮮やかに美しく残つて居るのを見るには實に驚かざるを得ぬ。その形は、レース細工に擬せたものもあれば、表紙の意匠に因んだものもある。或は箴言や題句などを打出したものもある。今日では、本の縁はどんなに荒く、どんなに出来て居ても、格別それを厭がる愛書家もないやうであるが、當時の蒐書家は、本の外部が美しく飾られて、どんなに投り出して置いても、苟しくも眼に見える所は皆綺麗でなければ承知しなかつたものである。

#### ○世界第一の手数のかゝつた本

凡そ何が異つた本といつたつて、恐らく今日も猶佛蘭西の De Ligue 公爵家に在る『基督の感激』と題する一書籍に及ぶものはあるまい。この本は、書いたも

のでもなければ、印刷したものでもない。本文の一字々々を葉に刻んで、その間には青い紙を織込んで、いかなる立派な印刷にも劣らぬ程に讀み易くしたものである。その文字の正確にして精細なることを見れば、これを造る爲に費された辛働と忍耐力の程が思ひ遣らる。あらゆる點に於て出来榮えの立派なことはたゞ歎稱するの外はない。其の積皮紙は此上もない上等な、高價な品である。千六百四十年に獨逸のルドルフ二世が一萬千デユカットで譲つて呉れと申込んだものだ。

これを今日の金で云へば六萬デユカットに當り、邦貨に換算すれば二十七萬五千圓ばかりになる。この本には英國の王室の紋章が附いて居るが、しかし何時英國に在つたもので、誰が持つて居たものか、その邊のことは明らかでない。

#### ○書籍と細君

學者で非常な勉強家の良人を持つた或る夫人が、其の良人の書齋に入つて來て云ふ、『貴郎は本にばかり嚙りついて居らつしやる。本がそんなに好きなら、妾も本に成りたい』そこで良人答へて曰く、『細君が本に成れるものなら、願くば曆書であつて欲しい。す

ると毎年新しいのを取り代へてやる。』

○書 相

人間に人相あるが如く、書籍には書相がある。熟練を經た觀察者は、人相に於けるが如く、書相を識ることが出来る。

○人の皮で綴じた本

英國のビュリー・セント・エドマンドのアセニアム・ライブラリーには人間の皮で綴じた本が一冊ある。その本は、表皮の持主であつた、Corder という男の傳記を書いたものである。コルダグには、マリア・マーティン (Maria Martin) と云ふ戀人が居たが、彼は其の女を、ビュリー・セント・エドマンド附近のレッド・バートンで殺した。其後暫くして殺された娘の母親は三晩續けて自分の娘がレッド・バートンに埋められて居ると夢を見た彼女は良人を説いて、其處に行つて掘つて見ると、果して娘の屍骸が出て來た。その頃はもう男のコルダグは他の女と結婚して居て、夫婦で丁度朝飯を食つて居る所に、刑事が來て捕縛した。事件の審理の間、世間では大騒ぎしてその事を噂さしあつた。結局、コルダグは罪狀明白になつて死刑に行はれたが、その屍骸

を解剖した醫者が、目下コルダグの傳記を書きかけて居るものがあると聽いて、屍骸から皮膚の一片を切取つて著作者に送つて遣つた。で其の傳記の一卷に、内容の主人公の皮膚で拵えた表紙をつけて上記の圖書館に寄贈したのが即ちその本である。この事件は、英蘭東部地方では廣く知られて居ることで、これを仕組んだメロ・ドラマさへもある。皮表紙の本は稀有の珍寶となつて、特に遺物愛好者の垂涎措く能はざるものである。

○ナポレオンの陣中文庫

ナポレオンの一種變つた頭腦の纖維から生れた、他に比類のない、極めて大難把な書籍製出の計畫があつた。彼は最も精選せられた著者の書籍を數千卷印刷して、それで『陣中文庫』なるものを造らうとしたのである。一人の専門的のヒッリオグラフィアにカタログを作らせて、既に書籍の印刷に着手して居た。ナポレオンの考へでは百二十人の組み方と二十五人の編纂者をして事に當らしむれば、六年を費さずして三千卷の本を造ることが出来るつもりだつたのである。

この多數の書籍の印刷に取蒐つてから、實際彼には

斯くして陣中に適當な書籍を供給したいと云ふ切なる希望はあつたものの、それ所ではない程戦争の方が忙しかつたので、暫くそれなりに居た。印刷費用の見積額は邦貨で云つて百六十三萬二千餘、鉛筆の尖端で世界地圖の上に、幾多の王國を拵えたり、搔き消したりして居た當時の彼にとつてはそれ位何でもない金高だつたのである。惜しい哉、其の後幾年ならずして、此の印刷屋と製本屋との恩人たりし皇帝は、そんな書籍の中から僅かに英國が差間えなしと認めて許したゞけの數架の書籍を携えて、南海の、岩石ばかりの一孤島へと追はれて仕舞つた。

○ミルトンの『失樂園』

舊臘の本誌に出たマクドナルドの『書籍及び讀書』と題する手翰に、たしかミルトンの *Paradise Lost* の收入を百五十圓とかしてあつたやうに思ふ。しかしこれには少し註釋を要する。この千古の名編が出版された條件に關する間違ひのない話しは下の如くである。ミルトンは最初此の詩編の初版千三百部の印税としてシモンズ (Samuel Simons) と云ふ本屋から五磅を受取つた。この取引が行はれたのは一六六七年の四月廿七

日である。初版を賣切つたらまた五磅、二版を賣切つたらまた五磅を支拂ふといふことになつて居た。同年八月二十日になつて始めて本になつて市場に現れた表紙は *Paradise Lost, a Poem in Tenne books by J. M.* とあるのみで、どのタイトル・ページにも出版人たるシモンズの名さへも見えない。賣價は三志であつた。次に一六六九年四月廿六日に(最初金を受取つてから滿二年目)第二回の五磅がミルトンの手に支拂はれた。即ちミルトンが自ら受取つた金は以上前後で十磅に過ぎなかつたのである。その第二版は、千六百七十四年に、十二編に増補されて市場に出たが、同じ年の十一月八日に作者のミルトンは死んだのである。一六八〇年になつてシモンズは、ミルトンの未亡人に八磅を支拂つて、*Paradise Lost* の版權を賣切つて仕舞つたので、それ以來ミルトンの家族は、此の詩編から一文も得ることは出来ないことになつた。その後程なくシモンズは同書の版權を、他の Brabazon Aylmer と云ふ本屋に二十五磅で賣飛ばし、後者はまた其の所有權の半ばを Jacob Tounson に賣り、爾來一七六七年に至るまで、*Paradise Lost* の版權は最終のトンソンの家に

在つたのである。

○本の大きさ

本の大小の起源は誰が調べた所でもなく、明確なことは判らないが、何でも quarto は一四六五年以来のものらしく、octavo format が始めて出たのは一四七〇年、12mo は一四七二年、32mo は、一四七三年に Tenson といふ書肆がヴェニスで出版したのが始めてあつたとすふ。また Aldus とすふ本屋は一五〇〇年に Virgili を出版するのに始めて octavo format を使つたんだと主張するものもある。

○ブリテイシユ・ミュージアムに

於ける英國のクラジック

ブリテイシユ・ミュージアムの目録に現れた文學功績の標準が面白い。バイブルは二十一巻の目録と、特別索引一巻とを以て敬意を表せられて居る。次が沙翁で、目録が五巻、ホーマー・ミルトン・シラーが各々二巻、ダンテは一巻中の一編を占むるのみであるが、しかし彼の名の下に這入る所は特に活字で印刷して、他の手で書いたものと一様ならざることを示してある。チョーサー、スペンサー、バイロン、バインス、セエ

レー、ウチーヅワース、テニスン及びロングフェルローになるはずつと減つて、頁或は欄で數へる位。小説家ではスコットが群を抜いで二巻の目録を捧げられて居る。ディッケンズ、サッカレー、キングスレー及びブルワー、リットンに遙かに降つて十四欄から三十二欄、ジョージ・エリオットに至つては僅かに三欄を宛てられて居るに過ぎぬ。この敬意の大小は、鳥渡變に思はるゝ所もあるけれども、一般公衆の意見の歸する所と見れば、大體に於て首肯かれぬこともない。

○十六世紀の人氣本

一五二一年には Erasmus の *Encomium Morie* (『馬鹿の稱揚』) が千八百部、一五二七年には同じ著者の *Colloquy* が二萬四千部賣れた。Thomas à Kempis の *De Imitatione Christi* は版を重ねること二千に近かつたと云ひ、Orlando Furioso も十六世紀中に六十版を重ねた。

○文藝復興期と現代

今日は印刷術が進歩して、本の價も廉くなり、頒布賣捌の手段も容易になつたから、本の賣行きも足が速いが、文藝復興期、前項の Erasmus 時代には左様も

行かなかつたらうとは、一寸常識學者の考へることである。然し事實は必ずしも左様ばかりでもない。今の Erasmus の *Colloquy* …… 異端の本として罪を受けたといふ風評が起るや否や、或る冒險なる出版人が一版に二萬四千部を刷つたものだから驚く。これでは現代の Robert Esmer や Looking Backwards の盛況も敢て異とするには足らぬ。昔も今も賣れるものは賣れたのであるが、しかし兩者の相違は、當年に在つてはいゝ本が澤山出たが、今日に於ては、いゝ本もいゝかゝはしい本も、共に一様に澤山出る。昔の人は一冊のいゝ本に、可なりの高い金を拂つて、買へば必ず讀んだものである。讀むだけの價值あるものでなければ買はなかつた。そこを見て取つて、これなら必ず賣れるといふ見極めがつく程のものでなければ、滅多に印刷に附せらるゝことが出来なかつたのである。これはいつぞやゼブ博士が劍橋で講演した一節である。

○書籍が與ふる幸福

Erasmus と比べて擧げた當年の賣れっ子 Thomas à Kempis の語に曰く、『自分は到る處に幸福を捜し求めた、しかし、小さき本を備えた小さき一隅以外の地に

於ては何處にもそれを發見することが出来なかつた。』

○書籍の世界

Leyden の圖書館員であつた Heinsius はよく下のやうなことを云つて居た、予は圖書館に来るや否や、戸を叩いて、快樂と、野望と、婪慾と、何によらず、怠惰の保母となり、無知と憂愁との生母となるべき一切の惡事とを閉出して仕舞ふ。そして總て世上の、自らの幸福を知らざる貴顯富有の輩を憫むが如き高き精神と其美なる満足とを以て、永遠其物の膝の上にて、多數の神來の靈魂の間に、われとわが席を占めるのであると。

○再び人皮表紙

*Life of Cortes* が主人公 Cortes の皮で綴じてあることは前に云つた。此種の例は敢て珍しいことではなない。本に用ゐらる皮は大抵は死罪に處せられた、世に名高い犯人の屍骸から剝いだものだ。ヨークシアのミズレーに近き、メクススボロー (Mexborough) 家の圖書館にも會つてこんな本が二冊あつたことがある。一冊は Sir John Cheek の *Hunt of Sedition*、五十一つは Braithwaits の *Arcadian Princess* 二冊ともに、十九世

紀の始め頃、殺人犯で處刑せられた、Mary Pateman  
といふヨークシアの巫女の皮を鞣して綴じたものであ  
る。巴里では或る本屋が、名高き Louvet de Courvray  
が皮を表紙にして小冊子を持つて居たことがある。ジ  
ョセフ・ザエルムスドルフといふ人は和蘭の Elizabeth 版  
の本を二巻人皮で綴じて居たし、倫敦の或製本屋は  
Hans Holbein の『死の舞ひ』の一部を、人皮で拵え  
た函に入れて藏して居た。英國のトヴェンシアのエク  
セターといへば寺院の多いので世に知られた都會であ  
るが、そのミュージアムに在る一卷の書の表紙は、一  
八三〇年に、自分の妻を毒害した罪によつて死刑に處  
せられた、George Udmore とすふ男の皮である。一  
八二一年の四月に英國のプリストルで Horwood とす  
ふ男が一少女を殺した罪で絞殺されたことがある。こ  
れに就いて、或る病院附きの圖書館に在る一書に、下  
のやうな商人の勘定書が入れてある。『John Horwood  
に關する種々の記事を集めて、當人の皮で綴じたるも  
のは代金一磅十志也、本の兩側には、拉丁語にて『John  
Horwood の眞正なる皮』と印字有之候。一八二八年  
六月、プリストルにて、エセッリス殿下附醫師リチャ

ード・スミス様。』

○古代の書卷の數

常識で考へて、印刷術のない時代の本の數は、極め  
て少數であらうと思ふのは尤もであるが歴史は往々に  
して、莫大な本の數を語る、埃及のトレミー家が累代  
集積した手書の本は羊皮に書いて、兩端に木を着け  
て卷物にしたもので、それが實際どれだけあつたか解  
らぬが、紀元前四十八年、シーザーがクレパトラの爲  
に埃及を攻めた時、これを藏して居たアレキサンドリ  
アの圖書館は兵燹に罹つて、多數の書は焼け失せた。  
次に紀元六百四十年になつて、この圖書館の本は再び  
サラセン人の爲に焼かれた。この回教徒は宗教的敵意  
から、これらの本の教うる所がわがコーランの教うる  
所と一致すれば、この本は無くてもよし、若し一致し  
なければ、有つて害あるものだといふので故意に燒棄  
てたのである。その後幾世紀かしてアフリカのカルセ  
ージが焼け落ちた時も大變な數の本が燒けた。歴史家  
は以上の大燒却の都度、失はれた數を七十萬或は五十  
萬など云つて居る。極めて史實を信ずるに用心深いギ  
ボンでさへも、此の書籍の數だけは、格別疑ひもせず

して承認して居る。千年二千年後の今日、本を手で書  
くを要しない今日でも、百萬巻を藏する圖書館は、日  
本には一つもない。東京帝國大學圖書館、各分科大學、  
教室、研究室の本を皆集めても十萬巻にどうかと思ふ。

○獨逸に於ける最も古き本

伯林の王立圖書館にある *Po-lu-f-u-lu* とすふ支那の  
貴重美術の書は、印刷された本として最も古きもので  
ある。金屬製の型で印したもので、其の製作は一三〇  
八年から一八一二年の間、本文、圖解共に鮮明で、綺  
麗なものであるといふ。

○原稿を描く日本の著述家

ずつと古き *Athenaeum* に、日本の著述家が書齋に於  
て述作に従事する光景を、西人一流の觀察で説明して  
あつたことがある。行燈のことは、『方形の白い紙提  
燈となつて居る。床の間か佛壇のことが *Recess*』と  
してある。座右には『茶の禮式』の道具などもあらう  
といふのだ。主人公の座つて、机に向つて居る態度も、  
其の周圍と調和して、極めて *idyllic* であるといふ。  
原稿紙としては、詩箋のことを、雅やかに色どられて、  
上から下へと線を走せた紙と説明して、そして作者は、

ペンを以て書くといふより、寧ろ毛筆を以て丹念に原  
稿を描いて居るのだといつて居る。著者と出版者との  
交渉は極めて上品である。日本の一文人は歐人の友の  
問ひに答へて曰く、『私は自分の方から出版人に金を  
支拂ふのである、著述の爲になら、金を失くしても惜  
しくない。しかし、何人に對しても私は私の作物で金  
を儲けることを許さない。』と。恚う説明して、更に附  
記して曰く。『Murray's 』、Macmillans 』、Harper  
』、Appleton 』、これを見よ、汝等に對する著者の威  
嚴は其處に在るんだぞ！』と。作者の眞の威嚴は、出版  
者側が作者を引張肌にするやうな、そんな小兒らしい  
單純さの中に存する。若し『西方の野蠻人』にして、  
斯かる人々に對して、著述から直接の報酬を得ること  
や、浮薄な世上の好惡に迎合して、決して損をしない  
やうな遣り方を教うるものがあつたなら、實によし無  
きことをするものであると云つてある。こんな風で原  
稿を描くことは、日本でもせいゝ紅葉山人位を最後  
として、今日ではまづ跡を絶つて仕舞つた、こゝで云  
つてある『作者の威嚴』などが、日本の地を拂つたの  
はいつの昔のことやら。今日に於て、この西人の説明

を讀むと隔世の感がある。

○驚くべき蠹魚

一六二六年の六月二十三日、劍橋の魚市場に出た一尾の鰻を開いて見ると、驚いた、その胃の腑の中に本を一冊呑んで居る。本は帆木綿で包んだまゝであつたけれども、ヒドク汚なくなつて居る。John Firth が書いた、宗教問題に関する論文を集めたものである。劍橋のミード (Meed) と云ふ人が、Sir M. Stuteville に宛てた手紙に此事を詳記して曰く、

『小生は小生自らの兩眼を以て、其の魚、其の胃、帆木綿の片、其の本を目撃し、これによつて茲に申上ぐることを立證仕るべく候。たゞ小生が見落したるは、其の魚を開く所にて、こは市場に於ける女の香賣の別舎に於て行はれ候ふ爲、多くの人は見ることを得ず候ひき。先づ魚の頭部を切離せしが、それに垂れ續きたる胃の中に、何物か篙張り居り候ふ爲、搜りし處、上述の如き始末と相成り候由、昨朝小生と同じ場所何人が居たりとするも、其の人は、よし證據なくとも、その事實を信ぜざるを得ざるべく、件の魚は、Iynn より來りしものにて候ひん。』

この手紙は今日もブリテイッシュ・ミュージアムに在る。

魚腹から出た本は、著者の Firth が獄中で書いたもので、こゝに不思議なのは、作者は之れを書く時、牛津の魚房といつて、多數の囚人が魚類の汚穢なる臭氣に中てられて死亡したのを監房に收れられて居たことである。本は劍橋で、當局の手に於て再び印刷されて、Fox Pisces と表號を與へ、魚舎と本と庖刀と木版畫を表紙にしてある。

しかしこんなことは、もつと近い時代に於ても例のないことでもない、一八九一年に、英國のペンザンスに近き Newlyn で、矢張り鰻の腹から三片本の小説が一部出て來た。今度のは最後の二頁が無くなつて居たばかりで、あとはソックリ其の儘にして居たといふことである。

○ビ、リオ定義追加

前に Abbé Rive の定義を擧げたが、その追加として、今度は米國で出版された、G. H. Ellwanger の The Story of My House と題するステキニ面白く本に書してある下の定義をこゝに引く、

Bibliodemen

書敵或は書魔。

- Bibliophage 本を食つたり呑んだりするもの。
- Bibliocataphage 本の。
- Biblioleter 本を毀したり荒らしたり、亂暴に取扱つたりするもの。
- Bibliopollyon 本の害毒或は疫癘。
- Bibliophthor 本を掠めたり、盗んだりするもの。
- Biblioloigos 本の妖怪。
- Bibliolestes 本を四邊かまはず投げ散らすもの。
- Biblioklept 本の。
- Bibliocharybdis 本の妖怪。
- Biblioptos 本を四邊かまはず投げ散らすもの。

○『書籍の敵』

Blades の The Enemies of Books に曰く、本を盗むものは書籍の敵ではなし、盗まれた人に取つてこそ惡いことだけれども、本其物に泥棒が害を及ぼすやうなことはまづない、たゞ泥棒は甲の書架から、乙の書架に本を移すばかりである。眞に恐るべき書籍の敵は蒐集家であると。考古協會の創立者の一人であつた John Bagford は、十八世紀の初めに各國のライブラリーを歴訪して、大小種々の貴重書のタイトル・ページを片

端から引裂いて持つて歸り、それに色々な参考物を加へ、國民別けにし百冊からの本を拵えた。これは現にブリチシュ・ミュージアムに存して居る。此の本が學術上の至大の參考資料たることは争はれぬけれども、斯くして無数の貴重書を形なしにした罪は、到底其の功勞を以て購ふことは出来ぬ。タイトル・ページやフロンテイス・ページを集めたもので、これは皆古代の貴重書から取つた、天下に類のない珍寶ばかりである云々といふ商人の廣告はよくあることである。又多數の本のフロンテイス・ページを破り取つて肖像を蒐集するものがある。本の一部分が不完全になれば、それが全く毀はれるのは瞬く内だ、一六六四年に出た Atkins の Origin and Growth of Printing など云ふ本が、今日一冊も残つて居ないのは全く此の種の道樂を成すものであるからである。この本には Logan が描いたもので、チャールズ二世が、Sheldon 大僧正と、Albermarle 侯と、Charendon 伯とに侍せられて居る畫がある。勿論王の方には誰も用はないが、侍者の肖像が非常に珍しいものなので、蒐集家はそれを裂き取る爲に本を買つたものだ。今日古本のカタログを見ると、到る處に



タイトル缺、プレート幾數缺、最後の二頁缺などしてあるのは、みんな此の種の『書籍の敵』の毒手にかゝつたものだといつて居る。



ストックより

▲露國太公殿下御渡日を機會として露西亞に關する新著を少々御紹介申しませう。露國に關する近著中、政治外交等の表面的事實より

は露國民族の内生活を描寫し且闡明したものとて近頃最も著名なヤリントソフ夫人の Russia: The Country of Extremes であります。左記の目次を御覽になれば略ぼ内容が解りになります。

- (1) 極端の國
- (2) 胡索克の過去
- (3) 露人の純潔と僧徒
- (4) 異安心と宗門的牢舎
- (5) 歴山第一世の奇異譚
- (6) 六十年代の教育改革と其以後
- (7) 學生運動と政治生活
- (8) 歴山二世の暗殺
- (9) 煽動者——嚴刑と問題
- (10) 毎日の生活の影像

本書は露西亞人のピクトリアル・サイコロジと稱されてゐますが、露西亞民族の内生活を描いたもので、是れ程面白く且含蓄の深い説明を與へたものは餘り多く見當りませぬ。露西亞を知るにはスラブの民族を十

# 圓滿寺雜記 北 臨 南

近 人々一人者越前國敦賀津氣比大明神一人者  
駿河國宇戶濱牛頭天王同女躰者波利采女是

各別作社壇奉崇之故云四三所午頭天王仍祭  
禮之日同於一所奉致札尊就中卯月八日天王

如來像并四天幡華鬘  
等奉渡遂供養殊致聖  
朝安穩之御祈禱面々  
抽忠勤各々疑懇念時  
節佛事于今無退轉者  
也當所往古本堂者號  
常光寺吉志部御堂者  
稱圓滿寺新古相并名  
常光圓滿寺常光者中  
道文理躰不變之像圓  
滿者圓融之沖徽滿足  
之儀也是則表國家常  
安御願圓滿之由兼又  
明神三所影向之時者



9140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5

# 攝津國吹田村常光圓滿寺緣起事

# 右當寺之為躰也南臨奈海北

## 攝津國吹田村常光圓滿寺緣起事

右當寺之為躰也南臨奈海北據青山去麓不幾長沙宜濱而温厥草創者天平之比彼濱每夜如朝日放光明事有之見人成奇異之思爰行基菩薩於當國被建立數箇之寺院之刻傳聞上件子細往來彼濱邊被尋事次第之處有一人老翁任日來之見問委奉語之行基且為見知其實否且為拜見彼光明一夜逗留及深更如老之翁言出現奇特之光明行基拜見隨喜感淚難抑此光定為佛菩薩利生方便之嘉瑞歟仍連々致祈請之處天平聖曆七年亥三月十四日夜有夢想演中古老之僧出來向行基被申之樣我是天悲關提菩薩也年來海中流蕩為衆生化度雖寄來此為砂埋未遂濟度利生之本願為示此事□夜々放光若欲知其實否須掘濱砂云云忽然夢覺畢

行基成不思議之思明朝以夢想之趣相觸彼近

邊即令掘之處果得靈木殆如赤梅檀便行基營

薩手自所奉造立聖觀音之尊像也遠近聞之貴

賤合志企壹間四面草堂之造營同季八月二日

事始同廿八日上棟同十一月十八日忽終其功

奉安置斯靈像即以行基菩薩為導師供養既訖

然此像常離座而虛空立參詣之尊卑多以拜見

之間彌致渴仰疑信心者也被御堂依在濱中號

云濱堂常依放光改稱常光寺新造御堂參詣之

輩致歸依渴仰之誠依之寺院與隆人法繁昌之

間止住成群故長目之勤

不怠晨昏之行無絕發行

基睡眠之裏復拜光明堂

中赫奕而曰髮老翁淨衣

若冠并薄衣女房其外眷

屬等有之行基驚而具尋

子細傍侍人申云參詣之

人々一人者越前國敦賀津氣比大明神一人者

駿河國宇戶濱牛頭天王同女躰者波利采女是

也云云何故御詣哉之由被尋申之處奉為當伽

藍守護有御參詣也云云問答之後忽焉不見彌

成奇特之思被奉貴敬本尊聖觀音即於寺邊作

小社為此所鎮守明神而須施和光利物益之由

行基令致感勳之勸請給矣抑今以此寺稱常光

圓滿寺事有治承二年戊戌隣庄吉志部村內本

願宮左衛門大夫所建立之圓滿寺破壞之刻常

光寺住侶村人等相議彼圓滿寺同丈六阿

各別作社壇奉崇之故云四三所午頭天王仍祭

禮之日同於一所奉致札尊就中卯月八日天王

殊不忘當寺最初垂跡之根源於氣比大明神

前奉昇居七社之神與重致三更之舞

奉備隨分之法樂者也

文治二年丙午三月

前執行法印

# 文治二年

# 攝津國吹田村常光圓滿寺緣起事

# 右當寺之為跡也南臨蒼海北

## 攝津國吹田村常光圓滿寺緣起事

右當寺之為跡也南臨蒼海北據青山去麓不幾長沙宜濱而温厥草創者天平之比彼濱每夜如朝日放光明事有之見人成奇異之思爰行基菩薩於當國被建立數箇之寺院之刻傳聞上件子細往來彼濱邊被尋事次第之處有一人老翁任日來之見問委奉語之行基且為見知其實否且為拜見彼光明一夜逗留及深更如老之翁言出現奇特之光明行基奉拜見隨喜感淚難抑此光定為佛菩薩利生方便之嘉瑞歟仍運々致祈請之處天平聖曆七年亥三月十四日夜有夢想濱中古老之僧出來向行基被申之樣我是天悲關提菩薩也年來海中流蕩為衆生化度雖寄來此為砂埋未遂濟度利生之本願為示此事□夜々放光若欲知其實否須掘濱砂云云忽然夢覺畢

行基成不思議之思明朝以夢想之趣相觸彼近

邊即令掘之處果得靈木殆如赤梅檀便行基營

薩手自所奉造立聖觀音之尊像也遠近聞之貴

賤合志企壹間四面草堂之造營同季八月二日

事始同廿八日上棟同十一月十八日忽終其功

奉安置斯靈像即以行基菩薩為導師供養既訖

然此像常離座而虛空立參詣之尊卑多以拜見

之間彌致渴仰凝信心者也彼御堂依在濱中號

云濱堂常依放光改稱常光寺新造御堂參詣之

輩致歸依渴仰之誠依之寺院與隆人法繁昌之

間止住成群故長目之勤

不怠晨昏之行無絕爰行

基睡眠之裏復拜光明堂

中赫奕而曰髮老翁淨衣

若冠并薄衣女房其外眷

屬等有之行基驚而具尋

子細傍侍人申云參詣之

人々一人者越前國敦賀津氣比大明神一人者

駿河國宇戶濱牛頭天王同女跡者波利采女是

也云云何故御詣哉之由被尋申之處奉為當伽

藍守護有御參詣也云云問答之後忽焉不見彌

成奇特之思被奉貴敬本尊聖觀音即於寺邊作

小社為此所鎮守明神而須施和光利物益之由

行基令致感懃之勸請給矣抑今以此寺稱常光

圓滿寺事有治承二年戊戌隣庄吉志部村內本

願宮左衛門太夫所建立之圓滿寺破壞之刻常

光寺住侶村人等相議彼圓滿寺同丈六阿彌陀

各別作社壇奉崇之故云四三所午頭天王仍

禮之日同於一所奉致札尊就中卯月八日天

殊不忘當寺最初垂跡之根源於氣比大明神

前奉昇居七社之神與重致三更之舞禮陪從

奉備隨分之法樂者也

文治二年丙午三月十八日記

前執行法印大和尚位朝鑒筆

# 文治二年丙午三月十八日記

如來像并四天幡華

等奉渡遂供養殊致

朝安穩之御祈禱而

抽忠勤各々疑懇念

節佛事于今無退轉

也當所往古本堂者

常光寺吉志部御堂

稱圓滿寺新古相并

常光圓滿寺常光者

道文理跡不變之像

滿者圓融之沖徽滿

之儀也是則表國家

安御願圓滿之由兼

明神三所影向之時

# 川 淀

號三第

日十月五年一十四治明

## 電車 觀 好 尚

一週間に五度は、神戸に往復する私に對つて、逢ふ人毎に必ずエライでせうと、同情するやうなせぬやうな問ひを發する、私はこれに答へて、いつもさういふ、イエ何ともありません、却つて電車往復のおかげで、私は非常な利益と趣味とを感じるのですといひます。

第一電車には時間といふ面倒なものが附き纏ふけれど、電車にはこれがないだけでも嬉しいのです、極つた時間に極つた流車が出るといへば、何の事もないやうですが、その時間カツキリにその流車に乗らうとするのは、なかく、氣を使はねばなりません、ドウかすると狂ひ易ひ時計と首引で、ヤレ時間が過ぎたイヤまだ、時間が来ない、

といつもハア／＼して、クダラヌ時間といふものゝ爲に、仕事も手につかず、話しも緩くり出来ずも、尻半分、ソ、クサまぎれに乗り後れまい／＼と焦る、この忙はしい世の中に堪つたものではありませんが、電車には、ソんな心配はカラ無用です

それから上下無差別といふ電車の乗合制度が、私にはうれしいのです、白い切符だの、青いのだの、イヤ赤馬だの、といふ七面倒、否三面倒な御規則が何になる、私は外観紳士もザル振りも膝を交して、座席を譲り合ふ電車が氣に入つてゐる

尤も遠距離旅行ならばイヤ知らず、近い旅程には一等も三等も、ソんな階級制度は頓と入らぬ事と思つてゐるのです。

次には禁煙を揭示してある電車は、吹がら投りツ放しの流車よりも、一倍うれしいと思ふのです、無論これは私一人の自分勝手論でもありません

うけれど、私にはこの煙草を喫はせぬといふ電車に乗るのが私一人のセメても、修養だといふ電車であるのです、といふのは私は一セコンド間も煙草なしでは困る人間なのです、その困る人間がナゼ禁煙が好いといふのか、ソコが即ち修養と申す

ところなのです、止さう／＼と誓ひながら、止されぬのは、この煙草といふ毒草、病が膏肓に入つて了つた私には、禁煙電車にでも乗らなければ思はず知らずツイ左の手が紙函を取り上げて、右の指が働いて一本チョコイと抜き取る順序になるので

す、悪い癖で困つてゐるのです、いつか一年有半ばかり、最愛の此のたば子の君に離別を告げた事もあつたのです、が到頭東京行の流車中で、再び元のヅル／＼ベツタリに喰付いて了ひました流車は私の仇です、神戸往復の前後二時間半ばかりの間、一日にこれだけの禁煙時間を與へて呉れる電車の賜ものは多とすべきであります、電車に乗らねば禁煙が出来ぬといふのは、何たる薄志弱行です、ハイ意地の汚ないのは煙草のみのソコが修養の足りないところですよ、

まだあります、電車の利とするところは、かういふ事があるのです、いつか神戸に繪はがき展覧會が催されたとき、私は自分のや友人のを一まとめにして、大きな荷物が出来ました、御承知の額面仕立ですから、何うしても嵩ばりませんが、その大きな荷物を持つて、電車に乗れば好かつたのですが、チト大き過ぎるから、劍突くを喰ふのも面白くはない、と不圖魔がさして流車の方へ廻つたのです、スルと赤帽の曰くには、コレは預けに

ならねば行きませぬ、といふものだから言ひなり次第に預けた、貴重品だといふので、シタ／＼カ運賃を拂はさせられた、ソシテ展覧會が濟んで、復り路には電車に乗つた、前と同じ嵩高な荷物も何の故障なしに通過した、往きには高い運賃を拂つて、おまけに硝子の半分もメゲられた流車のた蔭で、未だに私の額面は疵ものです。

數へ来れば、電車の利益は際限がありませんが電車に乗る人は大抵停留が多過ぎるから、退屈でならぬとコボします、ソレが又私には反對なのです、私はポケットにいつも愛讀の書物が入れてあります、興來り神旺する時には、停留して居らう

が、居るまいが、電車に乗つてゐるといふ觀念はありませぬ、風通しの好い、煤煙も飛んで来ない明窓の下に、快心の書を繕きつゝ朗誦する楽しみは、外に比べものがない、お蔭で停留の退屈を知らず、永年本箱に入れたまゝの書物すらこの頃で

は大方読み盡しました、夜分薄ぐらい流車にでも乗つて御覽じろ、細かい文字は目の毒です、そののみならず流車は早や前紀世の遺物といつたやうな感じがします、ソレ切符を買ふ、押合ふ

罪人でも調べるやうな事、ね、プラットホームの隅に數千萬な流車制度では、かの御規則が今に現行さつと行つて、スーツと乘つてはいろ／＼の不便も小言に車に比べて私の蟲が好き、な流車よりも、小意氣な流車が何うしても疲れが少く、ヤ餘り好い事づくめで、も如何ですから、この邊

## 今津よ

拜啓兎角物質的の事のみならず、算盤を左にし、日歩に遷生に取つては、蓋し不世間にては郊外生活を以し、電車若くは流車にての仲間入せるもの如くも、郊外生活は寧ろ我等も、壹日を緩うすれば壹御承知の如く物價は騰貴の有様なるに拘らず、收遷生等は収入の比例のみに住む能はず、敢て体裁も、實際無智の勞働者といふ桶鉢の飛ぶを見、夕に到底子供に教育に多少なへ得る處にあらず、去て家賃は比較的廉なるべし、悪臭、上水の不自由、コに蒙る兒童の悪感化、數結局遷生等は是等の不快か、若くは収入不相應の候が、如斯事は一時を忍ばず、唯一條の活路は郊外第一家賃は近來別荘向に、として、普通の家屋は家

▲露國大公殿下御渡日  
新著を少々御紹介申し  
露國に關する近著中、



▲露國太公殿下御渡日を機會として露西亞に關する  
新著を少々御紹介申しませう。  
露國に關する近著中、政治外交等の表面的事實より

本書は露西亞人のピクトリアル・サイコロジと稱  
されてゐますが、露西亞民族の内生活を描いたもので、  
是れ程面白く且含蓄の深い説明を與へたものは餘り多  
く見當りませぬ。露西亞を知るにはスラブの民族を十

るのです、いつかも一年有  
たば子の君に離別を告げた  
が到頭東京行の瀛車中で、再  
りに喰付いて了ひました瀛  
往復の前後二時間半ばかり  
の禁煙時間を與へて呉れる  
べきでありませぬ、電車に乗  
こいふのは、何たる薄志弱行  
ないのは煙草のみのソコが修  
車の利とするところは、かう  
いつかも神戸に繪はがき展  
私は自分のや友人のを一ま  
何物が出来ました、御承知の  
何うしても嵩ばりませぬ、その  
電車に乗れば好かつたので  
から、劍突くを喰ふのも面  
魔がさして瀛車の方へ廻つた  
の曰くには、コレは預けに  
いふものだから言ひな  
品だといふので、シタカ運  
ツシテ展覽會が濟んで、復  
た、前と同じ嵩高な荷物も何  
た、往きには高い運賃を拂つ  
半分もメゲられた瀛車のた蔭  
は疵ものです。

今津より (第二信)

木 母 生

拜啓兎角物質的の事のみ申上る様に候へ共、  
右に算盤を左にし、日歩の駆引に頭を腦まし居る  
迂生に取つては、蓋し不得已義と御寛恕下被度候  
世間にては郊外生活を以て壹種の道樂の如く見做  
し、電車若くは瀛車にて通勤すると云へば、紳士  
の仲間入せるもの如く思惟するもの有之候へど  
も、郊外生活は寧ろ我等腰辨に取つての最急務に  
て、壹日を緩うすれば壹日の損ある様考候  
御承知の如く物價は騰貴に踵ぐに騰貴を以てする  
の有様なるに拘らず、収入は其割に進まず、而も  
迂生等は収入の比例のみを考へて九尺二〇の長家  
に住む能はず、敢て体裁を飾る譯にあらざる候へど  
も、實際無智の勞働者と軒を列ね、朝に連木の舞  
ひ桶鉢の飛ぶを見、夕に鄭聲淫語を耳にする事は  
到底子供の教育に多少なり共注意を拂ふもの、耐  
へ得る處にあらず、去て新市街の新建に移らんか  
家賃は比較的廉なるべし、然れど右に左に接近せ  
る大小の工場より吐出す煤烟の濛々たる、下水の  
悪臭、上水の不自由、コソ泥棒、附近貧民窟の爲  
に蒙る兒童の悪感化、數へ来れば殆ど際限なく、  
結局迂生等は是等の不快不便に對して眼をツツる  
か、若くは収入不相應の家賃を奮發するの外無之  
候が、如斯事は一時を忍ぶべし、長く忍ぶべから  
ず、唯一條の活路は郊外生活と存候  
第一家賃は近來別荘向に建てられたるものは例外  
として、普通の家賃は家賃の廉なる、到底市中の

此にあらず、而も庭の廣き、空地の多き、臺所の  
ユツタリせる、間取は大阪の家屋の如く四疊半、  
貳疊、參疊と細く刻む様のケチな風無之、迂生の  
宅の如き階下は單に十疊、八疊、七疊半の三間に  
有之候而して海は近く山は遠からず、廣げき野、  
清き小河、四時の風物、疲憊せる心身を醫して餘  
りあり候、第二村の連中は言動粗野なれ共、氣風  
は質朴敦厚且親切にて、大阪の如く近所合壁互に  
氣を許さず、宛然重圍の中にあるが如き有様とは  
宵壤の差にて、氣も心も筈び伸び致候、村の子供  
も新市街のその如く、妙にひねくれ居らず、一  
體にスナヲなる様に候、事情右の如し、衛生上よ  
り見るも、精神上より見るも、將た經濟上より察  
するも、郊外生活の優れる事は御了解被下候事と  
存候、郊外生活の必要なる他の理由は、衣服費を  
節し得るの一事に有之候、御承知の如く婦人は兎  
角虚榮心に富み、且競争心有之、隣りの嬢さんの  
着物を見ては、我兒にもと夫の手許を顧みず強請  
するとか、向ひの奥さんの帯を羨みては、同じの  
を無理算段して買入るゝ様の事は、日常目睹する  
處にて、家政の紊亂は多々因をこゝに發し候、中  
には美服を纏ひをる妻を持つる夫に、賄路を取ざ  
るものなしと極言するもの有之候位にて、それが  
爲不知不識墮落するものさへ有之候が、田舎にて  
は鎮守の祭にても唐縮緬が關の山位にて、一向に  
氣が張らず、有合せの衣服を着け居りてすら、近  
隣の人は驚く位に有之候へば、妻君の競争心の穢  
牲となり、四苦八苦する様の場合絶無と可相成候  
又同じ大阪に在りては、從來膨脹せる家政を遽に  
縮少する事は殆ど不可能に有之候、郊外生活は  
質素簡易なる生活に轉するの好機を與へ可申候、  
此点に就ては他日尙詳述可致候、  
以上勿卒の走り書き頗る意を悉さず候へども、愉  
快と經濟とを兼ねたる家庭を作り、仍て以て眞の  
慰藉を得んとせらるゝには、郊外生活を斷行する  
外良策なき事の微意、御了解被下候へば本懐の至  
りに御座候 早々

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being the widest. There are small blue triangular marks on the left edge of the page, one near the top and one near the bottom.

順  
泰  
厚  
製

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being the widest. There are small blue triangular marks on the right edge of the page, one near the top and one near the bottom.

以下  
3丁  
白紙

陳  
棟  
厚  
製



東  
橋  
原  
製



